令和元年度(2019 年度)

高校生交換留学促進事業報告書

High School Student Exchange Program 2019-2020

新　し　い

自　★　分

始　ま　る

令和2年(2020 年)3月

北海道教育庁総務政策局教育政策課

Hokkaido Office of Education

Bureau of Administration and Policy

Educational Policy Division

はじめに

北海道教育委員会は、昭和 55 年に結ばれた北海道とアルバータ州の姉妹提携を礎とし、平成６年度から、両地域における高校生の交換留学を行う「高校生交換留学促進事業」を実施しております。本事業は今年度で 26 回目となり、これまで 70 の道立高校等から 208 名の生徒が参加してきました。今回は、全道各地から 10 名の高校生が約２か月間留学し、大きく成長して本道に戻ってきました。

平成 30 年度、本道を訪れる外国人が過去最高の 311 万人を記録し、直近 10 年間で約５倍になりました。日本社会全体においてもグローバル化が進行し、日本企業の海外進出あるいは外国企業の日本進出により、就職後も様々な場面で外国人と交流する機会が増えています。そのような中、高校生段階で海外留学を通じて異なる習慣・価値観に触れること、外国人と意思疎通を図ること、見知らぬ土地で多くの苦楽を経験することは、何事にも代えがたいものです。

今回の参加生徒に対するアンケートでは、10 名全員が「この経験を職業選択や進路選択に生かしたい」と回答しており、過去の参加生徒の中にも、本事業をきっかけに海外の大学や国内の外国語系大学へ進学した生徒がおりますが、多くの参加者が本事業を契機に、本道はもちろんのこと、国内外で大いに活躍されることを期待しております。

最後になりますが、生活習慣の違いに戸惑い、意思疎通に御苦労されながらも、異国の若者を温かく受け入れ、愛情を持って様々な経験の機会を創ってくださったホストファミリーの皆様、業務多忙な中で御尽力いただいた高等学校の教職員の皆様に心から感謝を申し上げます。

道教委では、引き続き本事業が、本道とアルバータ州との友好親善に寄与するとともに、本道の高校生に夢と目標を与える機会であり続けるよう努めてまいります。

令和２年（2020 年）年３月

北海道教育庁総務政策局
教育政策課長　新　免　寛　啓

■留学生一覧

	学　　校　　名	学校所在地	学年	性別
1	北海道滝川高等学校	滝川市	2	女
	Spruce Grove Composite HS	Spruce Grove	11	男
2	北海道札幌月寒高等学校	札幌市	2	女
	Harry Ainlay HS	Edomonton	10	女
3	北海道札幌国際情報高等学校	札幌市	2	女
	Memorial Composite HS	Stony Plain	11	女
4	北海道苫小牧東高等学校	苫小牧市	2	女
	Harry Ainlay HS	Edmonton	10	女
5	北海道登別明日中等教育学校	登別市	4	女
	Western Canada HS	Calgary	10	女
6	北海道函館中部高等学校	函館市	2	女
	Bishop Carroll HS	Calgary	11	男
7	北海道旭川北高等学校	旭川市	2	女
	Medicine Hat HS	Medicine Hat	12	女
8	北海道帯広柏葉高等学校	帯広市	2	女
	Harry Ainlay HS	Edmonton	11	男
9	北海道鹿追高等学校	鹿追町	2	男
	Jasper Place HS	Edmonton	11	男
10	北海道釧路湖陵高等学校	釧路市	2	男
	Lindsay Thurber Comprehensive HS	Red Deer	11	男

■事業実施日程

実　施　内　容	月　　日
事前研修会 （道庁別館8階会議室）	令和元年６月21日（金）
アルバータ州留学生来道	令和元年8月16日（金）
アルバータ州引率教員による受入学校訪問	令和元年8月19日（月） ～23日（金）
アルバータ州留学生離道	令和元年10月12日（土）
本道留学生出発	令和元年11月17日（日）
本道引率教員による受入学校訪問	令和元年11月18日（月） ～22日（金）
本道留学生帰国	令和２年１月12日（日）

1　生徒編

この経験で学べたこと

北海道滝川高等学校　２年

（きっかけ）

私は高校一年生の時アメリカのマサチューセッツ州に８日間留学した経験がありその時に異文化を学ぶことにすばらしさを感じました。しかし、８日間のうち、４日間しかホームステイできなく、さらには日本人が周りにいたので、困ったときには日本語を使い、１日中英語だけを話すことがありませんでした。このプログラムに参加すれば、８日間では体験できなかった異文化に触れることができ、長期にわたって英語を話すことになるので、英語力向上につながると思ったため参加を決意しました。

（日本での生活）

“日本で最高の思い出を作ってもらう”これは私がパートナーを受け入れるときに自分自身に定めた目標です。私はたくさんの留学生の受け入れの経験がありますが、男女の異性のペアでの経験はなく、どうなるかわからないまま彼との生活が始まりました。案の定、学校での友達作りの問題や健康面での問題であったり、性格上のすれ違いがおき、とても大変でした。ですが彼によりよく過ごしてもらうために、できる限りのサポートをしました。途中、疲れから“ホントに彼はこの日本での生活を楽しんでいるのだろうか？私は自身の目標を全く達成できてはいないのではないか”と考えるようになりました。しかしお別れの時、“すごく楽しかった！また日本に来たい！お別れしたくない！”と涙を流してくれ、私は彼が楽しんでくれたこと、自分の目標を達成できたことにとても喜びを感じました。

（カナダでの生活）

・高校生活

私の学校はスプルースグローブハイスクールコンポジット、通称ＳＧＨＣといいます。演劇、フード、カメラテクノロジー、コスメなど、日本では体験できないような授業や、ドイツ語、フランス語、日本語などの外国語の授業も取ることができました。スペアという自習の時間を持つこともできます。私は日本語、コスメ、リーダーシップ、英語の授業を受けました。日本語の授業はパートナーと一緒に受け、先生の手伝いをしたりボランティアとして参加しました。コスメの授業はマニキュアや髪の毛の構造、髪の毛のアレンジの実践などを学べて、とてもためになりました。リーダーシップの授業は社会に通ずる人材を育てるために話し合いやイベントのボランティアをする授業で、話し合いを数多くするため、英語力がとても鍛えられました。私の学校にはカナダの一般的な学校にあるＥＳＬ（第一言語が英語でない生徒のための英語の授業）の授業がなく現地の高校生と全く同じ英語授業をうけ、文法や品詞などを勉強しました。

・クリスマスとニューイヤー

　クリスマスは日本と違い国全体で盛大にお祝いします。大体１か月前になるとラジオにクリスマス専用のチャンネルが開設され、店には数多くのクリスマスグッズが並びます。私はその日、バンフに行き、スキーをし、その帰りに教会に行きました。そこではクリスマスコンサートが開かれ、一緒に聖歌を歌いました。最後には教会全体でキャンドルをともしとても美しかったです。３１日はホストファミリーの友達家族と過ごし、祝いましたが日本よりも規模は小さく、日本とはクリスマスとニューイヤーの過ごし方が逆で文化の違いを感じました。

・えっ！それ捨てちゃうの！？

　これは私がカナダに滞在中、何度も私の頭の中を駆け巡った言葉です。例えば、大皿に盛られた料理がたくさん残ってしまったとき、日本ならタッパーなどに入れ冷蔵庫に保蔵しておくのが一般的だと思います。しかしカナダでは残ったらたとえその量が多くてもゴミ箱に捨てます。

　また、資源ごみと生ごみ、かん、ビンなどの区別が一切なくすべて一つのごみ箱に捨てていました。ごみの分別はとても大変で、一つのごみ箱に捨てることができるならとても楽だと思います。しかし地球温暖化の進んでいる今日、そういった心がけを国民一人一人がすれば、環境は少しずつ良いほうに変わっていくのではないかなとおもいました。

（最後に）

カナダでの生活は楽しいことばかりではありませんでした。学校生活に精一杯になり、精神的に疲れて暗くなってしまい、何事も恐れ、挑戦したくないこともありました。しかし母が“やってみなくちゃわからないよ”と励ましてくれて、やってみたらおもろい、ということが何度もありました。この経験も参加しなければ味わえなかったこと、学べなかったことがたくさんあります。ですから何事も決めつけずにいろいろなことにチャレンジしていくべきだと思いました。私の母は私が何か新しいことをしようか迷っているとき、“案ずるより生むが易し”だといって私を励ましてくれます。今回の経験で本当にその通りだと確信しました。そしてその言葉は私の人生のモットーになりました。これからもその精神でたくさんの経験をしようと思います。

交換留学を終えて

北海道札幌月寒高等学校　２年

【きっかけ】

中学生の頃から留学に行きたいと思っており、高校生になって学校での留学プログラムが無かったので、自分で色々と探しこのプログラムを見つけました。

元々洋楽や海外ドラマなどが好きだったので海外の文化などに興味があり、留学できたら日本との文化の違いなどを学んでみたいと思っていました。

実際に留学出来ればインターネットや書籍で調べるのとは違い、自分の目で見て、肌で触れることでしか学べないことがあるのではないかと思いました。

このプログラムの留学先であるカナダは、多民族国家で「人種のサラダボウル」といわれるくらい様々な人種の人が暮らしているので、色々な経験ができると思いました。

それに、自分が行くだけではなく留学生の受け入れができるという点にもとても惹かれました。なぜかというと、家族で英語を学べる良い機会になると思ったことと、受け入れ期間と留学期間合わせて４ヶ月あるので、普通に自分だけ留学するよりも良いと思ったからです。

【日本での生活】

私のパートナーはユナという女の子で、最初は日本の生活に不安を感じていたようで、学校では自分から積極的にクラスの友達に話しかけることができませんでした。やはり、文化の違いがあるので日本での生活に上手く馴染むことができるか心配でした。

そこで学校では私の友達を紹介したり、色々と学校生活でのサポートをしたりしました。勉強面ではどんな日本語を学びたいのかを聞き、私の時間があるときは日本語を教えるようにしていました。

私はちょうど部活がとても忙しい時期になってしまい、帰宅が遅くなったり休日も部活があったりと居ないことが多かったので、その間は母が日本語を教えてあげたりと、自宅でコミュニケーションをとっていてくれたのでとても助かりました。

私はあまり一緒に色々な所に行くことができませんでしたが、留学の２ヶ月間は長いようで短いので、日本のことをたくさん学んでいって欲しいと思っていました。

日にちが経つと、私が思っているほど心配する必要はなく、休みの日には新しくできた友達と出かけるなど、日本の生活を楽しんでいるようで安心しました。

でも日常生活の中では価値観の違いなどで困った事もありましたが、そういう時には本人を交え話し合いをすることで、ほとんどの事は解決できたと思います。

私は生活を共にする中で留学生だからと遠慮せずに、家族のように接することが大事ではないかと感じました。

私のように部活をしている場合は、少し部活などをセーブできるならそうした方が良いのではと思いました。

色々な場所に連れて行かなくても、できる範囲の様々な経験をさせた方が良いと思います。それには生徒だけではなく、家族全員でサポートできることが必要だと感じました。

【カナダでの生活】

カナダについてからは時差ボケがひどく、海外が初めての体験ということもあり、日中は眠たいことが多く最初の２、３週間が一番大変でした。

実際に行ってみると、自分が思っていたよりも英語が通じなく苦戦をしましたが、パートナーのサポートのおかげもあり友達を作ることもでき、楽しく過ごすことができました。

本当に様々な人種の人がおり、見た目で出身国が判断できない位でした。色々な国の人がいて、だからこそそれぞれの個性を尊重しあっていて、カナダは良い国だと思いました。

日本では周りと少し違うというだけで目立つことが多いですが、カナダでは髪の毛の色を派手にしている人も多く、誰も周りと違うことを気にしている人はいなく、自分は自分だという人が多かったです。

私は学校で、様々な人種の人と友達になることができました。学校では優しい人が多く、英語が話せなくても翻訳アプリを使ってくれたり、簡単な英語に直して話しかけてくれたりと、男女問わず仲良くすることができました。知らない人でも積極的に私に話しかけてくれることが多くありました。

先生の中でも日本が好きという人がいて、私に簡単な英語で話しかけてくれたりしました。思ったよりも国民性は日本に近いと感じました。

日常生活の中で“thank you”、“sorry”という言葉を、皆よく使っていると思いました。例えばバスを降りる時には、運転手の人に“thank you”という習慣がありました。

カナダは多民族国家なので色々な国のレストランがあり、どのお店でも残した食べ物は発泡スチロールのケースに入れて持ち帰ることができたり、日本では見ない紙ストローのお店があったりと、環境面について日本との違いをとても感じました。

それから私が住んでいる日本に比べて、道でホームレスに合うことが多かったです。

カナダの生活の中では言語だけではなく、カナダの政治や国についても知る事が多かったので、他国の事についても興味がわきました。

普段学校では学べないようなスラングや国の事についても学ぶことができて、良い経験になったと思いました。

【カナダで感じた学校の違い】

カナダの学校では基本的には単位制でクラスがなく、自分で好きな教科を選択することができて、日本の大学のようだなと思いました。主要教科とは別にオプションという自分の好きな事について専門的に学べる授業がたくさんあり、とても楽しく授業を受けることができました。

私はコンサートバンドという日本でいう吹奏楽のような授業と、ギター、動画や画像編集を学ぶ授業を受けました。日本に戻った今でも、動画編集は楽しく続けることができています。

英語教育に関しても、留学生や移民など様々な人種の人が多いので、ESLという英語を母国語としない人のための授業があり、その中でもレベル分けもされているなどサポートが充実していると思いました。

カナダの学校では多種多様な人種の人々がいるので、それぞれのルーツや趣向を尊重し、個人の得意分野を集中的に伸ばすような教育環境だと思いました。

【最後に】

このプログラムに参加させてくださった道教委の方々を始め、出入国の手助けをしてくださった引率の先生、パートナーが日本に来た際の学校生活を助けてくださった札幌月寒高校の先生方と友達、このプログラムへの参加を支えてくれた両親や兄や姉、そしてカナダで温かく私を迎えてくれ、毎日の生活を支えてくれたホストファミリーには大変お世話になりました。

私を応援してくれたみなさんの温かいご支援があったからこそ、無事にプログラムを終え帰国することができたと思っております。みなさんに心から感謝をし、これからの学校生活や自分の将来へつなげていけるよう努力しようと思っています。

本当にありがとうございました。

交換留学での経験

北海道札幌国際情報高等学校　２年

《応募》

前々から留学をしたいとは思っていたのですが、勇気が出ず機会を逃してしまうことがありました。そこに、この交換留学プログラムを知って、思い切って応募することを決めました。特にこのプログラムでいいなと思った部分は、先に留学生を受け入れしてから、その留学生のところにホームステイするというところです。その部分に安心を感じたのと、二カ月という短くなく長すぎない留学期間に魅力を感じ、応募に至りました。

《留学生受け入れ》

突然パートナーになった人からメールが来て、いよいよ始まるんだ、と、家族でドキドキわくわくしながら、準備をして待っていました。八月中旬は、台風の影響が大きかったため、無事に飛行機は千歳についたのですが、迎えに行くのは、次の日になってしまったので、空港でのウェルカムボードを持ってのお出迎えができず、少し残念でした。初めて会ったときは、どのように接したらいいかがわからず、あまりうまく話をつなげて会話をすることができませんでした。家の案内や、荷解きを手伝いながら少しずつ距離を近づけていきました。やはり、カナダには制服がある学校は少ないので、制服を貸してあげるととても喜んでいました。

一泊二日で登別の温泉に泊まり、伊達時代村に連れて行ったり、ほかにも動物園や夜景など札幌や小樽をたくさん観光できたと思います。写真を撮ることも好きだったので、フォルダがいっぱいになったと、嬉しそうに話していました。

二カ月というものは、はじめは長く感じていましたが、実際にはとても短く、あっという間だったので、留学生のために時間をもっと割いていたらよかったなと少し後悔しています。そして、あっという間に二カ月が過ぎ、帰国の日が来たのですが、また、台風の影響で帰国日がおくれてしまいました。行きも帰りも、台風の影響を受けるという不運なできごとですが、今となってはいい思い出です。

《カナダへ留学》

出発してから、エドモントンにつくまで、飛行機に乗っている時間はほぼ半日で、乗り換えの待ち時間を合わせると、相当な時間がかかりました。夜について、パートナーと再会できることはとても楽しみでしたが、ホストファミリーと会うことが少し心配でしたが、初日からよくしてくれてとても安心しました。次の日から、学校でとても大変だったのですが、パートナーが気遣ってくれて、学校案内もしてくれて、一日目から楽しかったです。二日目には、事務の方と話し合って、

自分の時間割を作れました。自分の受けたい授業を受けられるのは、とても嬉しかったです。時間割は、パートナーとすべて違うものだったので少し不安でしたが、はじめは教室まで連れて行ってくれたりと、とてもありがたかったです。

週末には、一泊二日でジャスパーやバンフに連れて行ってくれました。ほかにも、West Edmonton Mall や、隣町に行ったりと、スキー、観光、お買い物をたくさんしました。そして、クリスマスには、たくさんパーティーをしました。合計で三回パーティーに参加しました。どれも豪華で、プレゼントもたくさんもらえて、日本では経験できないようなことを本場で経験してきました。とても楽しかったです。

年末には、ホストファミリーみんなで一週間スキー旅行に行きました。大家族だったので、ロッジを丸々一つ借りて、そこに泊まりました。スキー場は歩いて行ける場所にあるので、ほぼ毎日スキーに行ってきました。ホストファミリーみんなスキーやスノーボードがとても上手でついていくのに必死でした。

《気づいたこと》

カナダの人もとてもいい人なのだなと思いましたが、日本人は、気遣い、謝罪や感謝をちゃんとするのだなと思いました。海外の人には、言いすぎると思われているとも聞いたことがありますが、私は、多くの謝罪や感謝でよい人間関係を築いている、素晴らしい文化だと海外に行って、思いました。ほかにも、日本の文化のいいところを発見できたいい機会でした。

《最後に》

この交換留学プログラムを通して、様々なものを見て、挑戦してみて、今までにはないような素晴らしい体験を身をもってすることができました。この四カ月間は、とても濃く、一生忘れられない思い出になると思います。この経験を、今後の学びや、将来に役立てていけるようにしていきたいと思います。この交換留学を通して、肌で感じたことを記録に残して、忘れないようにしていきたいと思います。この交換留学にあたって、たくさんの方々にご支援、ご協力していただきました。本当にありがとうございました。

「北海度・アルバータ交換留学記」

北海道苫小牧東高等学校　２年

［留学のきっかけ］

このプログラムを知ったのは高校に入学してすぐの時で、何よりも魅力的だったのはカナダの高校に通える事、経済的な支援を頂ける事でした。中学の頃から海外への興味が強く将来就きたい職業に英語が必要な中、その頃の自分は金銭面で憧れの留学とは無縁のように思っていましたが、一年間アルバイトで貯金をし両親を説得出来た時は、自分の将来が少しだけ開けたように思いとても嬉しかったのを覚えています。

［ナオミの受け入れ］

ナオミは心優しく、本当に良い友達になれました。最初は物静かで緊張していましたが、新しい体験をするたびに天真爛漫に喜ぶのが本当に可愛らしく、家族全員がすぐにナオミを大好きになりました。週末には札幌、千歳、小樽や登別で観光や買い物を楽しみました。その頃は簡単な英語のやり取りだけでしたが、ナオミの欲しいお土産リストのものを探し回ったり、女子高生が好きなもの、タピオカや洋服などを楽しみ、意思疎通が出来ることに大きな喜びがありました。学校にもすぐに馴染む事ができ、チアダンスチームで一緒に踊ったり放課後はカラオケやプリクラ、回転ずしなど日本の文化を楽しんでいました。2ケ月もの間、特に問題が起こらなかったのも何でも話してくれるナオミの誠実で勇敢な性格のおかげでした。家族全員が感謝しています。

［エドモントンでの生活］

11 月、エドモントンの空港で１ヶ月ぶりにナオミと再会し喜びました。そして温かく迎え入れてくれた、７歳の妹ケイコとホストファミリーとの生活が始まりました。ホストファミリーには感謝しかありません。愛情をもって接してくれ、毎日高校まで送り迎えしてくれたり朝早くからお父さんとお母さんが２人で食事を作ってくれました。料理は全てが信じられない程おいしく、日本と同じく白米が主食のインドネシア料理がとても気に入りました。お腹いっぱいなのに毎回「もっと食べて！」と言われた時は幸せでした。

休日はステーキや中華などのエドモントン中の様々なレストランや大きなショッピングモールに連れて行ってくれたので、毎週末が待ちきれないほどでした。カナダではレストランや洋服屋さんの店員と会話することが多く、日本から留学していると伝えるとフレンドリーに迎えてくれたことが嬉しかったです。中にはサプライズでデザートを用意してくれたり、最も印象に残ったのは、最近に日本人の小さな養子の女の子を引き取った男性がその子の写真を愛おしそうに見せてくれ、涙ぐんでいた事です。

バンフという国立公園へ行った時には、綺麗な山々や湖、街を散策したりエルクやバイソンといった動物の料理にも挑戦しました。どちらも牛肉のような味だったので美味しく、良い思い出になりました。他にもずっと憧れていた NHL の試合にも連れて行ってくれ、会場のダイナミックな演出には驚きっぱなしでした。

クリスマス休暇の間は、市内に住むインドネシア人のお友達のお家をまわり、パーティーをしました。インドネシア語の会話や歌が行き交い、たくさんのインドネシア料理を食べ、小さな子と遊

んだり、牧師さんのお話をろうそくと共に聞いたりと、エキゾチックな空間でした。その他にもホストファミリーと接する時間が増え、ゲームをしたり、ナオミとケイコと私の３人で料理を振舞ったり、楽器を練習したり、家族の一員として接してくれてとても嬉しかったです。

お別れの数日前、ナオミとケイコが幼かった頃のホームビデオを見せてくれました。楽しそうに踊ったり遊んでいる女の子を見ると、自分が幼いころのビデオと全く同じと言っていいほど似ていて、生まれ育った国こそ違えど共通点ばかりで、さらにナオミが愛おしくなりました。お別れの空港では涙をこらえきれず、とてもさみしくなったのを覚えています。

［ハリーエインリー高校での生活］

高校には本当に多くの人種の生徒がいて、色々な言語が飛び交い、高校自体が１つの世界のようでした。２，８９０人もの生徒がいて、大半の生徒は温かく親切に手伝ってくれたりしましたが、アジア系の生徒が多いからか、自分が外国人である事を伝えないと不自然な英語を怪訝な目で見られることもたまにありました。ですが、良い面は先生との距離が近く、友達のように相談に乗ってくれる事です。

授業は ESL(外国人向けの英語授業)、デザイン、コスメ、体育、日本語の５つを選択しました。１つの教科は 75 分で、１日に４つの授業を受けます。時間割や提出の課題、先生からの連絡はコンピューターで管理されていて、自分の端末から確認できる所が画期的でした。毎時間違う生徒と授業を受けるので、沢山の生徒と関わることができ充実していました。ESL では皆が違う国出身でそれぞれの訛りが強く、先生が聞きとるのに苦労していましたが、明るく楽しい授業でした。他の日本人留学生の子と話したり、お別れのプレゼントをくれたりして思い出になりました。一番お気に入りだった授業はデザインで、コンピューターグラフィックスを学びました。3D アートの制作ソフトを使い、英語のチュートリアル動画を見ながら立体的なドーナツやコーヒーを創りました。完成した時の達成感が強く、今でも自宅のパソコンで製作を続けています。

私と仲良くしてくれたのはナオミが属するK-POP ダンスクラブの子たちで、放課後は毎日ショッピングモールやマクドナルド、タピオカ屋さんで一緒に過ごしました。本当に優しく、おもしろいことが大好きな子たちで親友のように接してくれました。また、国は違ってもどれも日本の高校生と同じような会話が何処か可笑しかったです。休日も一緒に買い物へ行き、年越しに花火を見て、クリスマスやお別れの時にはプレゼントや手紙をくれて涙を流してくれた事も私の宝物です。

［最後に］

今回のプログラムに関わってくださった方々に心から感謝いたします。英語の上達だけでなく、ナオミや沢山の仲間との出会い、想像を超えた経験、何回も思い出して楽しめるくらいの思い出ができました。カナダでは最初、周りの環境に恵まれていたにも関わらずホームシックになりましたが、その時に気が付いたことは全て自分の気の持ちようだという事でした。自分の態度次第で毎日が有意義になる事を身を持って経験し、それ以降は異国での生活とぶつかっていけるようになりました。また、１人では生きていけない事、困った時にはいつでも助けてくれる人がいることを忘れずに、身に付けた行動力を今後に生かし、またいつか海外へ行くことが目標です。本当にありがとうございました。

アルバータ州交換留学を終えて

北海道登別明日中等教育学校　４年

＜きっかけ＞

もともと海外に興味があり、いつか留学したいと思っていたので応募しました。また、以前海外に行ったとき、自分の英語力と積極性のなさを痛感したので、このプログラムに参加してそれらを向上させたいと思ったからです。

＜受け入れ＞

パートナーのニカが来日する前は、主にメールやインスタグラムを通じて会話をしていました。その時にお互いの趣味や食生活について話せたことは良かったです。学校生活で必要なものや、日本での生活の様子を写真とともに紹介しました。来日してからでもいいやと思うことでも、事前に伝えておくことでその後がスムーズにいきやすいと思います。

来日後は、主に英語で会話していました。学校では始めは、授業中に英語の本を読むなどあまり積極的ではありませんでした。１週間くらいたつとクラスにも慣れインドから来ていた留学生のこと仲良くなり、楽しそうでした。３週間ほどたつと一緒にいすぎて私が気疲れしてしまいました。そこで先生に頼んで、席替えの時席を離してもらいました。初めは慣れるために一緒にいることもありますが、いつまでもそうしているとお互い煮詰まってしまうので程よい距離感は必要だと思います。

休日は登別温泉の地獄谷、伊達時代村、美瑛町の青い池などに連れて行きました。登別温泉や時代村では、足湯や忍者など日本の文化を体験できるのでとても喜んでいました。

＜渡航前の準備＞

私がカナダに行く前は、友達ができるかとても不安で、期待でワクワクということはあまりありませんでした。緊張のほうが大きかったです。パッキングの際は、ニカが実際にどのような服を着ているか写真を送ってもらい、持っていくものを決めました。それでも持っていきすぎて帰りのパッキングが大変でした。英語の勉強は特別なことはしていませんでした。語彙力を増やしておいた方が良かったなと思います。

＜カナダでの学校生活＞

私の通っていた学校は、生徒数が約３０００人のとても大きな学校でした。そのため、授業間の休み時間は階段が物凄く混みあいます。しかも休み時間は５分しかなかったので大変でした。

授業は８５分のクラスが４コマでした。私は、体育、日本語、ELL(English Language Learner)、演劇のクラスをとっていました。体育のクラスでは、フロアホッケーやビーチバレー、ミニゴルフ、ボーリング、ドッジボール、バスケットボールの試合を観戦したりしました。どれも日本とは全く違い、とても楽しかったです。体育の授業が一番好きなクラスでした。日本語のクラスでは先生のアシスタントをしていました。演劇のクラスでは、学期末の発表会に参加させてもらえて、とても

良い体験になりました。また、自己紹介の時に名前のほかに自分のことをどの性別で呼んで欲しいかを聞かれました。このような性に関する質問は日本ではみられないので驚きました。実際に、演劇のクラスには LGBT の生徒がいました。ほかにも発達障害を持っている生徒もいましたが、特に隠すわけでもなく自分から教えてくれました。人と違うけれど、それが当たり前だしそれが自分だという印象を受けました。ELL のクラスでは、リーディング、リスニング、スピーキング、ライディングのテストがあり、大変でした。宿題の量は多くないけれど、一人でやるとかなり時間がかかるものでした。ホストファミリーに手伝ってもらっていました。

心配だった友達もたくさんでき、想像以上に充実した学校生活を送ることが出来ました。また、先生方がよく気にかけて下さり、本当に助かりました。素敵な教師の方々に出会えて、心の支えになりました。

クラブ活動は、カルチャークラブに参加していました。スライドを使って様々な国の文化の紹介や、映画の上映等をしていました。また、バトミントンをカナダでもやりたかったので、二カが所属していたスポーツ施設でバトミントンのクラスでプレイしていました。大会にも参加することができ、とても良い経験になりました。

＜ホームステイ＞

ホストファミリーは皆優しくすぐに私を受け入れてくれました。ホームステイ中に困ったことは特にありませんでした。ご飯もきちんと栄養を考えて作ってくれました。ホストマザーの料理はとても美味しかったです。夜は二カと、二カの妹とよく映画を観ました。会話のきっかけにもなるし、英語の勉強にもなったので良かったです。

休日は、バンフに行ってスキーをしたり、ルイース湖でスケートをしたりしました。ほかにも友達のクリスマスパーティーや誕生日パーティーに行きました。ショッピングモールに行って買い物をしたり、映画を観たりもしました。毎週いろいろなところに連れて行ってくれたため、時間を持てあますこともなくとても楽しかったです。

＜学んだこと＞

この４カ月でたくさんのことに気が付き、成長することが出来ました。特に、困っているときに手を差し伸べてもらえるありがたさや、ちょっとした心配りの大切さを実感しました。私が困っていたとき、快く手を貸してくれた学校の先生方やバドミントンのコーチ、友達にはとても感謝しています。ホストファミリーも私が楽しく快適にカナダでの生活を送れるようにと考えてくれました。英語だけではなく、人のあたたかさも学んだカナダ留学となりました。このような素晴らしい機会を与えてくださり、ありがとうございます。また、いろいろな場面でバックアップしてくださった先生方や、家族の協力に感謝します。本当にありがとうございました。

アルバータ州交換留学を通して得たこと

北海道函館中部高等学校　２年

パートナーのライリーを受け入れ、そして自分が留学生としてアルバータ州で過ごした計４か月は私にとって学びの連続で本当に中身の濃いものでした。特にパートナーとの関係や、予想と少し違ったカナダでの学校生活とそこで学んだことついて重点的に紹介します。

ライリーと初めて連絡を取り始めた時、正直に言うとあまり密にコミュニケーションをとれていませんでした。お互いの返信のペースが合わずに私は焦りはじめ、ライリーが来日する直前は本当にこれから一緒に過ごしていけるのかが不安で仕方ありませんでした。しかし実際に会ってみてお互い慣れてくると実は本当に穏やかな良い人で、さらに生活リズムや食生活等においてほとんど気を遣わずに過ごすことが出来ました。また修学旅行をはじめとする学校行事にも一緒に参加し、途中でハプニングがあったときも先生方や私の両親、クラスメイトのおかげで乗り越えることが出来ました。初めに私が不安に思っていたことはすべて杞憂に終わり、その後私の留学期間中はさらに仲良くなり、ホストファミリーも家族の一員のように迎えてくれて一緒に素敵なクリスマスを過ごすなど幸せな生活を送ることが出来ました。

私の通ったビショップキャロル高校はアルバータ州の中でも特殊な校風の学校でした。そもそも授業がなく、生徒一人一人が各自の学習計画に沿って自習をし、困ったら先生方に質問をしたりセミナーに参加したりして学習を深める、というのが基本の形でした。私はその仕組みを殆ど知らずに通い始めたので、自分なりに理解し慣れるまでに時間がかかりました。初めのころは自習場所を探すことや複雑な校舎の把握など、細かいことに戸惑いましたが、その仕組みのおかげで得られたこともたくさんありました。例えば自立して行動する力や、友達との関わりです。私の場合、校内案内などをしてもらった最初の３日間以外は一人で行動しなければいけないことが多く、留学生として先生方へ自己紹介をしたり、学校のウェブページを見てスケジュールを組み立てたりするなど自分の計画や判断に基づいて行動することが求められました。（昼食も皆自由な時間に食べていたので、毎日友人と連絡を取り合いながら待ち合わせていました。）しかしそのおかげで、必然的に自ら様々なつながりで人と知り合うことができ、スケジュールが合う日は一日の大半を友達と一緒に過ごすことも出来ました。私は一日を各種セミナーやイベントの手伝い、クラブ活動、日本語クラスとの交流、合唱団の練習、そして自習等を中心に様々な事をしながら過ごしていました。また、主に日本文化クラブ（JLCC）と映画クラブの活動に参加していました。日本文化クラブでは丁度 Language Gala という異文化フェスのようなイベントがほかの学校で開催されていたのでみんなとよさこいを練習して披露し、その他にも日本から持って行ったお道具で茶道の体験会を開かせてもらいました。映画クラブでは映画を鑑賞して内容や撮影技術、編集についてのディスカッションが中心でした。初めて参加した時は難しくて聞いているだけでしたが、どうしてもついていきたくて家に帰ってから動画やインターネットで勉強して、何回か行くうちに楽しく充実した話し合いを一緒にできるようになりました。

二か月弱の学校生活で感じたことは、特にビショップキャロルでは充実度が完全に自分の行動次第だということです。もちろんパートナーや担当の先生、日本文化クラブの友達等、困ったときに頼れる人はたくさんいました。さらに一日中自習室にこもって時間をつぶしてもだれも気にしませんし、先生に紹介してもらった生徒やパートナーと常に一緒にいても楽しく留学生活を送れます。しかし私は自分の安心できる人や場所を大切にしながらも積極的にそれらから離れようとしました。その結果、予想もしていなかったような体験をさせてもらい、今でも連絡を取り合う親友もたくさんできました。またビショップキャロルにはほかの留学生や日本人が全然いなかったので、完全に英語に浸れるような恵まれた環境を最大限に生かせるように一日一日を過ごすことは本当に楽しかったです。

もしこの先にこの事業に参加しようと考えている人がいれば、私は迷わずおすすめします。そして私がここに書いたことで少しでも不安や心配事を解消できると幸いです。確かに日本での授業や部活から二か月も離れるのは大変なことですが、その代わりに得られる人間関係や実践的な語学力、行動力はその大変さを簡単に覆い隠すほど大切な物でした。

合計５か月間パートナーやその家族と共に過ごし、私は今まで以上に海外という別世界で生きることの大変さやわくわくするような素敵さを知りました。そして将来はさらに長い期間や違う言語にも挑戦を続け、実際に世界中の人と関わり合えるような人間になりたいと強く思いました。最後になりますが、北海道教育委員会をはじめとするこの事業に関わった全ての方、いつでも前向きに支えてくれた函館中部高校の先生方、最初から最後まで広い心で見守ってくれた両親、そして本当の家族のように受け入れてくれたホストファミリーに感謝します。ありがとうございました。

アルバータ州交換留学記

北海道旭川北高等学校　２年

「留学のきっかけ」

私は入学式の日に学校の教室に貼ってあったポスター見てこの留学プログラムの存在を知りました。その後、市の国際交流センターに行き具体的な内容を聞いて、パートナーがいることと、海外の高校に通えるということにとても魅力を感じ、応募することを決めました。私は以前から高校生になったら、海外留学に行きたいと思っていて、またそのことを両親にも伝えていたので、すぐに同意してくれました。小論文や面接などは大変でしたが、先生に呼ばれ、合格の紙を受け取ったときは、とてもうれしかった半面、パートナーに責任をもって日本での生活を一緒に過ごせるのだろうかという不安もありました。

「日本での生活」

私のパートナーの Emily とは受け入れが決まってすぐにメールや、SNS を使ってお互いのことについて話し合っていて、会うのがとても楽しみでした。２日後からちょうど体育大会があり、クラスの人たちと楽しめるか心配でしたが、私の友達が積極的に話しかけてくれて、Emily もすぐに心をひらいてくれ、楽しそうでした。部活の友達とおそろいのメガホンを作ってプレゼントしたところ、とても喜んでくれて嬉しかったです。一か月後には遠足で、地元の旭山動物園に行き、大好きな動物を見ることができて、嬉しそうでした。また、帰る一週間前からあった修学旅行も一緒に行くことができました。清水寺などのお寺で、おみくじの引き方や、お参りなどの仕方を教えたりするのが大変でしたが、英語で日本の文化を紹介することの楽しさや達成感を味わうことができました。京都では着物を着たり、奈良の東大寺では大仏を見たり、大阪ではたこ焼きを食べたりと日本の文化を紹介することができ彼女にとっても、自分にとってもいい経験になりました。放課後はたくさんの部活に積極的に参加し、クラスでも部活でも友達を作っていました。休日は最初の方、私が部活の大会等で忙しかったため、遠出ができなったのですが、地元の花火大会に行ったり、部活の友達と日帰りで富良野に行ったりしました。部活が落ち着くと、２泊３日で札幌、小樽、ニセコに行ったり、ルスツにも行ったりしました。札幌では、動物が好きだと聞いていたのでノースサファリサッポロに行き、また、藻岩山の夜景を見たりしました。小樽では小樽水族館に行き、小樽にホームステイしていた同じプログラムの友達と合流して一緒に回ることができ、久しぶりにカナダ人の友達と会って会話ができてうれしそうでした。

「カナダでの生活」

私の学校は全校生徒 1200 人程度で、留学生も 60 人とたくさんいました。そして、カナダに留学して良かったと思えたのが、その留学生たちと友達になれたことでした。中国・韓国・フィリピン・インド・・ドイツ・スペインや、移民としてもトルコ・インドネシア・南米・シリアなどの中東から来ている人がいました。もちろんカナダの友達もいい人ばかりでしたが、特に留学生や移民の友達は私の気持ちを察してくれたり、また各国の食べ物や文化などを教えあったりすることが、

自分の視野を広くしたり、世界の国の知識を得ることにつながり、とてもいい経験になりました。授業は、ESL（留学生用の英語）、Food 、Choral、PE、Japanese のクラスを選択していました。どの授業も面白く、特に PE ではラインダンスやフェンシング、ハンドボールなど日本ではできないような競技を体験することができたのが良かったです。ドッジボールの授業では日本と違って、ボールを何個も使い、また外野もいなかったので最初は戸惑いましたが、慣れてくるとそれも楽しかったです。日本語クラスでは、年賀状を書いたり、ジブリ映画を見たことが印象的でした。また、先生のように友達が書いた文章を添削するのもとてもいい経験になりました。最後の日にケーキを買ってきてくれてお別れ会をしてくれたのは、とてもうれしかったです。放課後は友達の家に遊びに行ったり、毎週金曜日は２時に学校が終わったので、友達とモールに行って買い物をしたり夜ご飯を食べたりしました。

私のホストファミリーはとてもいい人たちでした。ホストファザーはよくジョークを言って笑わしてくれたり、ホストマザーは日常生活で困ったことがないかといつも私のことを気にかけてくれました。ペットも三匹いてみんなとてもかわいかったです。夜ご飯の後はたいていカードゲームをしたり、パズルをしたり、映画を見たりしました。休日は、たくさんのところに連れて行ってくれて、特にバンフとエドモントンが印象的です。クリスマスは、初めてターキーを食べたり、たくさんのクリスマスプレゼントをもらうことができて、とてもうれしかったです。お正月は日本のように親戚でご飯を食べたりする人は少なくいつも通りに過ごすと聞いて、日本のお正月がカナダのクリスマスのような感じだと思いました。ホストファミリーとの別れは本当につらく涙が止まりませんでした。

「最後に」

今回の留学で、英語力の向上はもちろん、異文化に触れることで自分の視野を広げるということを、この留学を通して達成することができました。このような経験ができたのは、家族、友達、学校の先生方、教育委員会の関係者の皆さん方のおかげです。本当にありがとうございました。

アルバータ州交換留学を終えて

北海道帯広柏葉高等学校　２年

１．応募のきっかけ

私の母が昔に海外留学をした経験があり、その話を聞いていたので幼いころから英語を学ぶことや海外に行くことに興味がありました。大学生になる前にどこかに留学したいと考えていました。自分で留学のプログラムを探しても数週間だけだったり、学校を私費留学で長期間休んでもいいのかわからなかったりと、なかなか踏み出せない中で道主催の今回のプログラムを知りました。審査に通ったと聞かされた時は、まさか自分が海外に行けるなどと思ってもいなかったので驚きました。

２．準備期間

パートナーのロドリゴとは、主にＥメールを使って連絡していました。何度かやり取りしたあと、ロドリゴが LINE をインストールしてくれたので、LINE 上でテレビ通話もしました。受け入れのための家の準備などは両親が主にしてくれました。ウェルカムボードをつくるのは書道部の友人と私が所属している新聞局の友人に手伝ってもらいました。

３．日本での生活

台風の影響で１日遅れでロドリゴを迎えることになりました。私たちが彼に会ったときは疲れていると思いきや意外と元気そうでした。ロドリゴにとっては千歳市内のホテルで一泊できたことはかえってよかったかもしれません。

私の家は高校から遠く、朝は６時過ぎには家を出て JR に１時間ほど乗ります。ロドリゴは２か月の間、毎日早起きしてくれました。学校では、最初は私も一緒に行動していましたが、彼に仲の良い友達ができるとその人達と一緒に学校生活を送っていました。１番仲が良くなった友達の家に彼一人で遊びに行ったこともありました。

休日には一緒にゲームをしたり、野球観戦にいったり、釧路の方に住んでいる従兄妹家族のもとに泊まりに行ったりしました。私の入っている部活の全道大会が岩見沢市で開かれたため、３泊４日で遠征にも行きました。滞在したのは札幌市の中心部だったため、彼の好きな日本のアニメやマンガなどのポップカルチャーにも触れられたようです。

帰国直前に発生した台風の影響により帰国が遅れました。カナダで彼の家族や友人が待っているだろうと考えると、かわいそうでした。両親の仕事の都合上、出国当日に見送ってあげることができなかったのが残念です。

４．カナダでの生活

ロドリゴが通っている、ハリーエインリー高校に私も通うことになったのですが全校生徒３０００人のマンモス校ということで充実した設備やサポートがされていました。

初日は、英語のレベルを確かめるテストをしたり、手続きをしたりと慌ただしく過ぎていきました。ロドリゴの受けていた日本語の授業に参加してみると、多くの生徒が日本のアニメやゲームの話を

していました。日本のポップカルチャーが海外で人気だということを実感しました。

ハリーエインリー高校で私が受けた授業は、英語を第一言語としない人のためのクラスであるESL と P.E.と Concert Band、Food、Cosmetology です。日本語のクラスも受けたかったのですが組み合わせの関係上とることができませんでした。日本では見られないような専門的なクラスがたくさんあってとても楽しかったです。机に向かって、先生の話を聞くだけではなく、クラスメイトと話をしながら料理や演奏や作業をすることは多くのコミュニケーションを生みました。ほとんどの生徒が先生の問いかけに対して自分の意見や解答をもっていて、それを臆さずに発言する姿は、日本人にはあまり見られないものだと思いました。そのような授業の雰囲気に感化されたこともあってか、特に ESL では同じくらいの英語レベルの生徒が英語を勉強するので、自分も積極的に授業に参加することができました。

休日には、ホストファミリーに博物館や美術館に連れて行ってもらったり、映画を見に行ったり、友人とウェストエドモントンモールに遊びに行ったりしました。学校初日に受けた日本語クラスで最初に話しかけてくれた女の子と、その友達とでウェストエドモントンモール内にある遊園地に行きました。カナダに着いて、初めての友人と過ごす休日はとても楽しかったです。絶叫系アトラクションのスリルに驚きました。苦手なホラー系アトラクションに乗ったときには、友達が手を握っていてくれて優しさを感じました。

ホストファミリーが2泊3日でバンクーバーに連れて行ってくれたことも印象に残っています。エドモントンはとても寒いのですが、バンクーバーは暖かく、同じ国でも全く別の国にいるような気がしました。

カナダで食べたものの中で一番おいしかったのはプーティンです。ポテトフライにチーズとグレイビーソースがかかっていて、数少ないカナダ発祥の食べ物だそうです。

12 月 31 日の夜に見に行った花火も忘れられません。Government center という立派な建物の後ろから見える花火は圧巻で、特別な年越しになりました。

5．最後に

今回の留学で、楽しかったことがたくさんあったのと同様に、困ったことや辛かったこともありました。それらの多くが、私の英語力の未熟さゆえに伝わらなかったこと、伝えられなかったことだと思います。もしもまた次の機会があるならば、その時はより多くの人とコミュニケーションがとれるようになっていたらいいと思います。この経験ができたからこそ、英語を始めとする日本語以外の言語で世界の人々と交流することの大切さに気付きました。努力を怠らず、今回の留学を糧にこれからの日々を過ごしていこうと思います。

カナダ留学

北海道鹿追高等学校　２年

『交換留学をしたきっかけ』

私の高校では一年生の時に学校の行事で二週間のカナダ短期留学がありました。その時にカナダの方々とたくさん交流をし、とてもいい経験ができ、英語の楽しさに気づきました。その経験があり、「もう一度カナダに行き、好きな英語でコミュニケーションをとり、いろいろな面で成長したい」と思い、去年先輩がこのプロジェクトに参加しているのを知っていたので私も申し込みを決め留学することができました。

『２か月間パートナー受け入れ』

英語があまり話せない私はとても不安でした。しかしパートナーの Joshua と会い簡単な英語でコミュニケーションをとっていくうちに不安がなくなっていきました。学校では、初めは私と付きっきりで行動していましたが徐々に友達を作っていき私がいなくても楽しそうに過ごしていました。

放課後の部活動は一通り体験をしました。パートナーは野球が楽しいと言っていましたが危険なスポーツなのでやらせてあげられませんでした。バトミントンが好きと言っていたのでバトミントン部に毎日参加していました。本人はとても楽しそうだったのでよかったです。

休日は買い物に行ったり、友達の家に泊まりに行ったり、家でゲームをやったりなど、とても楽しい日々を過ごしました。時々イラッとしてしまうこともありましたが、お互いを理解して乗り越えることができました。パートナーも私もお互い良い経験ができたと思います。

『２か月間ホームステイ』

まず不安だったのは一緒に行く人と仲良くなれるかでした。しかしみんな気軽に話しかけてくれてすぐに仲良くなり、飛行機ではみんなで留学生を受け入れた時の話をたくさんしました。その時、帰りの飛行機はもっと話すことがあり楽しいだろうなと思いました。無事にカナダに着き、Joshua のホストファミリーと対面することができました。とても暖かく出迎えてくれたので安心しました。

学校は到着した翌日から始まりました。初日は受けたい授業の選択、学校の説明や案内で終わりました。私が最初に選択した授業は、体育、ヨガ、英語、化学でした。日本とは異なり４コマで１コマが８０分でした。初めの一週間はパートナーと付きっきりで行動しました。そしてあまり友達もできませんでした。友達ができるのかとても心配でした。

そのまま二週間目に入ったとき、もう一度授業を選択できたので英語を ESL に、化学を日本語に変えました。体育では体の大きい人がたくさんいてなかなか話しかけられませんでした。ヨガではとなりになった人と良く話すようになり、緊張感が少しずつなくなっていきまた。初めてのヨガは予想していたよりバランスや筋力を使ったのできつかったです。

ESL では、教室に入った時に拍手で迎えてくれて一気に緊張感がなくなりました。みんな英語を第二言語としている人なので完璧ではありません。その理由もあり積極的に話しにいくことができました。そのクラスには日本の人もいてたくさん助けてもらいました。ある日、隣の人が Google 翻訳で「あなたは英語が上手。たくさん話してみてください」とアドバイスをしてくれました。もっと頑張ろうと思いました。

日本語のクラスでは時々先生をしたり、みんなと同じように授業やテストを受けました。みんなは私に興味をもって話しかけてきてくれてすぐに友達になりました。翌日にはランチに誘われました。嬉しさもありましたが緊張が強かったです。そして誘ってくれた友達とカフェテリアに行くとなんと男子が一人もいない。ハーレム状態でした。緊張が強まりましたがみんな笑顔で迎え入れてくれました。

その日から毎日ランチを一緒に食べるようになりました。ほんとうに楽しいランチタイムを過ごせました。ランチで友達になった人と休日みんなでお出かけしたり、放課後学校に残って遊んだり、West Edmonton Mall に行ったりなど学校で一緒に過ごす友達ができました。みんなでダウンタウンに行き、お寿司を食べたり、買い物をしたり、ボウリングをしたりなど楽しかったです。学校に残る日は、みんなでダンスをしたり、勉強したり、日本の遊びをやったりなど充実した放課後を過ごしました。友達と過ごす放課後がこの留学で一番楽しかったです。

最終日にはさよならパーティーを友達の家でしました。映画を見て、ピッツァを食べました。パーティーの終わり際に私が作った動画をみんなに見せました。その動画を見てみんな号泣。みんなが号泣しているのを見て私も号泣しました。その後にみんなからのメッセージが書かれたカードをもらいました。メッセージを読もうとしたが私は手が震えて読むことができませんでした。パーティーが終わりみんなで West Edmonton Mall に行きました。友達は「友達の誕生日プレゼントを買う」と言い、私にどれがいいと思うか、メーカー、色、サイズなど聞いてきて結局スポーツパンツを買いました。そのパンツは友達への誕生日プレゼントではなく私へのプレセントでした。本当にいい、最高の友達を持ちました。友達とは帰国後も連絡や通話をしています。

ホストファミリーとは Jasper に行きました。Jasper に着き、家族で街を歩きながら買い物をしました。次の日はスノーボードをしました。スキー場の大きさに驚きました。リフトでは隣に座った人がすぐに話しかけてきました。本当にフレンドリーだなと感じました。クリスマスが近づくと Josh の祖父母の家に泊まりで行きました。クリスマスではたくさんの友達や親戚が集まりパーティーをやりました。たくさんプレゼントをもらい、とても楽しかったです。年明けの時、街では花火がいろいろな場所で上がっていました。年越しの時、私はベッドで寝ていました。カナダは年明けよりクリスマスのほうが盛大に行われると感じました。カナダのクリスマス、年越しを経験できてよかったです。

自分が行きたいと言ったところにも連れていってもらったししたいと言ったこともやらせてくれて、本当に自分のわがままを聞いてくれました。初めての経験もたくさんでき、本当に楽しかったです。ホストファミリーには感謝しかありません。

『まとめ』

　今回の留学ではたくさん学んだことがありました。英語力もそうですが、一番は人との繋がりです。知らない人が気軽に話しかけてきたり、初めて会ったのに遊びに誘ってくれたりなど前から友達だったかのような感覚でした。私はあまり英語が得意ではないのでうまく伝わらない時が多かったです。しかしお互いに不自由なく過ごせました。変な話ですがお互い気持ちで会話している気分でした。それを最も強く感じました。思い出もたくさんでき、その思い出は一生の宝物です。このプロジェクトに参加させていただき本当に感謝しています。ありがとうございました。

研修報告　～留学をおえて～

北海道釧路湖陵高等学校　２年

まず、僕の地域が釧路ということもあり、ほかの留学生と比べても、札幌から一番離れており、どちらかといえば、不便な点が多かったと感じています。無論、釧路に長い間住んでいるので、不便なことには慣れっこですが。　事前説明会、空港でのパートナーのお迎え、出発空港など、札幌近辺が本事業で使う主な場所であるため、札幌から遠い人は前日に札幌市内のホテルを予約するなど、大変なことが多かったです。今回は台風の影響も大きく、パートナーのお迎え前日に道庁の方がカナダの留学生用にホテルを取るなど、緊急で予定の変更があることが多々ありました。もともと、夜１０時にお迎えの予定だったので、釧路に住む私たちにとっては、お迎えが朝になってくれる方が実は好都合でした。

僕のパートナーは身長が１８０ｃｍほどあったので、ベッド探しに苦労しましたが、彼はアレルギーもなく、人当たりの良い性格だったので、すぐに我が家に溶け込むことができました。強いて大変だったことを書くならば、彼がどちらかというと内気で、あまり外に出なかったので、地域の紹介を十分にできなかったことがあげられます。しかし、彼は日本語がほかの留学生よりもはるかに上手で、多少日本語が通じない場面もありましたが、基本的には日本語で何でも喋ることができたので、英語ができない母も安心していました。彼のいる生活は私たち三人家族にとってはある意味イレギュラーであり、面白い体験をさせてもらいました。食事、衣服、習慣など何事においても一般的な日本人とはわずかに異なる点があります。そのような違いを経験、認識することで、家族内でも多様性が生まれたと思います。

いよいよ、彼が帰る日が近づいてきたときは、悲しかったですが、帰りの飛行機も台風の影響で欠航となってしまい、結局道庁の方が手配してくれたホテルに３～４日ほど滞在したようです。いっそのこと、台風が停滞し、帰国予定日の２日後に控えていた修学旅行に一緒に行けないものかと考えもしました。

パートナーが帰国して、のんびりしていると自分の出国日が、あっという間にやってきました。計画はすべて予定通りに進み、８時間ほどのフライトの後、カナダに到着しました。受託荷物受け取りの場所で、ホストファミリーが待っていて、疲れていた私の荷物の運搬を手伝ってくれたのは今でも忘れられません。着いた次の日から学校だったので、その日は早く寝ましたが、疲れは３日ほど続きました。カナダのご飯は日本、特に北海道に比べると劣る点が多く、食生活に慣れるのが一番大変でしたが、日本に帰ると何でもおいしく感じることが多く、嫌いな食べ物もすんなり克服できたので、結果的には大成功だったと思います。

自分の通っていた学校はとても大きく、端から端に行くのに 10 分はかかるほどでしたが、１週間後には慣れていました。英語、家庭科、理科、社会の授業を選択したので、宿題や、復習などは大変でした。最初の一週間は、友達もおらず、何かとつらかったですが、ほかの国から来た留学生と仲良くなり、よく色々な場所に行きました。不安なことが多かった僕にとって、彼らの存在はと

ても貴重であり、重要でした。そして、彼らのおかげで充実した留学生活を送れていたと思います。ホストファミリーの友達ともかかわりを持つことができました。そういう意味でもかなり広い人間関係を持つことができました。

別荘や近くの大都市にも旅行で連れて行ってもらうことが多く、非常にいい経験となりました。日本のように派手な正月を迎えることはできませんでしたが、友達の家にお泊りに行き、様々な映画やボードゲームをして、大いに盛り上がったのは昨日のように覚えています。遊んでいる時間も長かったですが、勉強も欠かさずにしました。特に英作文の勉強などは、ネイティブから無料で添削をもらうことができるのですから、英語の勉強に関しては、たとえ受験勉強であったとしても、非常に理想的な環境にあると思います。ほとんどの期間は冬休みに被っているとはいえ、授業の進むペースは想像以上に早かったので、学校の授業についていくのに必死でした。特に数学は大変だったことを覚えています。カナダの学校も冬休みに入ると、すぐにクリスマスが来ました。僕は誕生日がたまたまクリスマスであることもあってか、壮大に祝われました。家族内で大プレゼント交換会が開かれ、みんな目当てのプレゼントに必死だったのは忘れられません。道民ながらも初めてのスキーをカナダで経験し、ソリなどの様々なアクティビティもしました。そうして遊んでいるうちに月日は流れ、帰国の日が近づいてきました。空港では、スーツケースの重量が超過のギリギリ手前で預け、保安検査場の手前で涙の別れを告げた後、日本に帰国しました。

帰国後にも飛行機の遅延などで、千歳につく日が一日遅れましたが、無事に帰ることができました。今回の留学を通して、英語というものが単なる言語なのではなく、国際的に意思疎通を行うための１つのツールであることを実感しました。この経験は、僕の将来に大きく影響をもたらすものであり、非常にこの事業に参加してよかったという気持ちでいっぱいです。特に、不都合なこともなく、臨機応変に様々なトラブルを道庁の方々には対応いただき、改めてこの事業のすばらしさを実感しました。

2 保護者編

令和元年度北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業報告書

北海道滝川高等学校　保護者

　我が家は数多くの留学生を受け入れた経験があります。しかし今回は異性のパートナーであり、我が家では初のことです。そのため今までよりも大変かと思われましたが、学校の先生方をはじめ、友人や道職員の方々に支えられ無事に終えることができました。

留学生が滞在中、私たちが普段いかないような観光名所に訪れ、自分たちでは気付けなかった北海道の良さをあらためて知ることかできました。

この機会を通じて、異文化に触れ、英語を身近に感じることでグローバル化に対応した人間性を築けると思います。

また、この経験をたくさんの人たちと交流し、地域の発展をはじめ、北海道の発展に繋がればよいなと思います。サポートしてくださった方々には多く支えていただき心より感謝します。

北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業報告書

北海道札幌月寒高等学校　保護者

＜参加経緯＞

私が外国人から英会話を習っていることや、知人の家族に外国人がいて、普段から娘も外国人と接する機会があり、留学を希望しておりました。民間の留学プログラムの説明会に参加したりしていましたが、費用がとても高いために難しく、何とか知人の紹介などでホームステイができないかと探していたところ、学校で募集ポスターを見て応募したいと私に熱望してきました。

私も以前よりホストファミリーになってみたいと思っていたので、喜んで応募を勧めました。

＜受け入れ準備＞

もともとは娘の兄と姉の部屋があったのですが、自宅のリフォーム工事を行って部屋数を少なくしてしまっており、留学生の部屋の確保をしなければならないので娘の部屋を空けることにしました。

以前より娘は部屋にこもることが少なかったので、それほど負担にはなりませんでしたが、娘の部屋がなくなってしまうのも不便かと思い、一時的に私の部屋を娘の部屋として使用できるように準備をしました。

留学生用の弁当箱や弁当箱を入れるカバンなどを購入したり、洗濯室に留学生用の着替えを入れる引き出しの確保、洋服を入れるタンスの準備をしました。

あとは、通学する上で制服を着るのか？私服で通学するのか？制服で通学する場合の制服を購入するのか？もしくは借りるのかを予め留学生のお母さんに LINE で確認をし、制服を借りたいとのことだったので担当の先生にお願いをして卒業生から制服を借りることにしました。学校で履く上履きやジャージの用意も予め伝えておき、持参するということになりました。

留学生を迎えいれるまでの間、留学生本人やお母さんに LINE でメッセージを交わし、食事のことなどを確認したりしていました。

＜日本の生活＞

ウェルカムボードを手に出迎えることを楽しみにしていたのですが、天候状況のために当初予定していた空港での出迎えをできず、とても残念な思いをしました。

ホテルへ迎えに行き少し疲れた様子がみえましたが、帰り道これから通う高校の校門で記念撮影と学校を少しだけ見学して、家に戻りスーツケースの荷物を一緒に片づけました。片づけながら自宅内の説明をし、その後は部屋でゆっくり休んでもらいました。

初めての通学までの数日は、日本語で用意してきたスピーチ内容を一緒に確認したり、日本語の発音練習をしたり、言葉でコミュニケーションが取れない分、私がピアノ、娘がギターを弾きながら、留学生が知っている曲を三人で歌ったりして過ごしました。

できるだけ日本特有の食べ物（ラーメン、寿司、お好み焼きなど）を食べに連れて行ったりしました。どこか行きたいところは？と聞くと、いつも洋服を見たいというので札幌駅付近などよく行

く機会が多かったです。日本の洋服と文房具をとても気に入ってたくさん買っていました。
　色々と札幌近郊の観光もしましたが、留学生にとっては東京渋谷のスクランブル交差点や原宿、ディズニーランドはとても楽しかったようです。

　日本での生活の中で私が大変だったと思うことは、おおきく次の２つです。
■食事と生活習慣
・最初は何でも挑戦して食べてみたい！と言っており、好き嫌いも特にないとの事だったので娘と同じお弁当を持たせていましたが、ほとんど残してくることが多くどんなものを食べたいのか確認しても「大丈夫！」と答えるばかりで、私に言いづらいのではないかと心配をしました。
・留学生のお母さんから、夜２２時にはベッドに入れるようにとメッセージがあったのですが、うちの就寝時間は遅かったので生活リズムを変える必要が出てきてしまいました。
・カナダではシャワーに毎日入る習慣がないのと、洗濯をあまりしない習慣があったので、シャワーに入って就寝することと洗濯物をすぐにカゴに入れるようにと伝えましたが、着替えやタオルなどは部屋におきっぱなしということがほとんどでした。
■留学に対しての意識
・娘の部活動が忙しい時期にあたってしまい、学校から一緒に帰宅することが難しく、留学生にも部活動へ入るよう勧めてみました。いくつか見学にいったものの部活動へ入ることはせず、ほとんど学校から一人で帰宅することが多かったように思います。
なぜ部活動へ入らないのか？と質問すると「部活動の子達が怖い」と言っていました。
何が怖いのか？と聞くと「皆ジロジロと私を見るのが怖い」と言っていました。
積極的に話しかけて、友達を沢山作ってはどう？と話もしましたが、アルバータの高校では逆だということを話しており、どうしたものかと私も色々と悩みました。
留学生も日本に来た当初は、友達を沢山作りたい！と言っていたので、部活動で忙しい娘とではなく、別な友達と休みの日など出かけたりすると楽しいのではないかと思っていましたが、友達と学校帰りに出かけたのは２～３回ほどで休みの日を友達と過ごすことはありませんでした。
家でもほとんど英語で話すことが多く、積極的に日本語を学ぶ様子がみえなく、留学に対しての意識の違いを大きく感じました。

＜カナダの生活＞
　娘にとって初めての海外ということもあり、期待と不安の中で出発しました。
　娘からの連絡はほとんどなく、現地での生活は SNS を通して見ることが多く、楽しそうな生活を送っているように見えました。
　LINE で困っていることはないか？などと確認すると、お昼ご飯が足りなかったようで日本との生活の違いを感じることとなりました。日本ではお弁当の習慣があるのをホストファミリーは聞いたのか、おにぎりなどを持たせてくれたのですが、おにぎり一個だけや餃子のみということがあり、自費で色々と買っては食べていたようです。
　日本での生活が影響したのかは定かではありませんが、アルバータの高校では朝は留学生と一緒に通学していましたが、学校へ着くと学校内で会うことはなく、当然ランチを一緒にすることもな

いので、自分から積極的に行動をして沢山のお友達を作っていたようです。
　韓国人のホストファミリーということもあり、食事はほとんど韓国料理、家で見るTVは韓国のもの、会話も韓国語と英語が入り混じっていたようで、カナダに留学というよりは韓国に留学したような感じだと言っていました。
　娘は色々と観光へ連れていってもらえると期待していたのですが、ほとんど連れて行ってもらえることはなく、ホストファミリーと出かけたのはスノーボードのみだったようでした。楽しみにしていたクリスマスも何もなく、期待していただけにとても残念がっていました。
　休日はほとんど別のプログラムで留学している学校で知り合った日本人のお友達とモールへ出かけることが多く、その分モールで食事や買い物をするので、予定以上の費用がかかってしまうこととなりました。

＜検討事項＞

- お弁当の習慣がない国なのでお昼代をどうするか？など、費用負担についてもう少し細かな決まりがあると良いと思いました。
- 色々と観光に連れていくようにとのことだったので、観光に関わる費用負担をしましたがカナダでは日本にいる時ほど観光には連れて行ってもらえず、そのあたりの確認を事前にしていたらと思いました。
- 留学する時期がイベント時期なので、宗教上の問題などもあると思いますが、どのように過ごすのか？など、事前に確認できたら良かったと思います。
- 留学生の親戚や兄弟がちょうど日本に来ていたようですが、カナダの担当の先生から身内と日本では会わないようにと言われていたようで、後から話を聞いてせっかくの機会だったので会えると良かったと残念に思いました。このようなことも事前に確認できていたらと思いました。

＜最後に＞

　留学生を初めて受け入れ生活を共にするなかで、娘と一緒に悩んだりしましたが、外国人の知人に「国際交流は押し付けるものではなく、本人がそこから学んでいくもの」と言われ、ハッとしました。
　一生懸命に北海道の良さや日本の良さを伝えなければと焦るばかりに色々と押し付けてしまったのではないか？と、今回の交換留学では考えさせられることが多々ありました。
　年齢的に多感な時期にこのような経験ができることは、娘と留学生、その家族にもたらす影響は、今後の生活において多大な影響をもたらすであろうことは計り知れません。
　何事もなく無事にプログラムを終了することができ、言葉や住んでいる国は違っても同じ人間として大事なことは何か？と考えさせられる場面を経験できたことは、このプログラムに参加できたからだと思っております。
　北海道教育委員会のご担当者をはじめ、北海道札幌月寒高校教職員の皆様、生徒の皆さんに感謝を申し上げ、報告とさせていただきます。

平成 31 年度・アルバータ州高校生交換留学促進事業報告書

北海道札幌国際情報高等学校　保護者

【参加理由】

いろいろな留学プログラムの中から、娘がこのアルバータ州高校生交換留学促進事業を選んだのは、カナダへの憧れと、二カ月という期間がちょうどいいと感じたからです。

【受け入れ】

留学生の受け入れは初めてで、英語を話す機会も多くなかったので、正直何をしたらいいのか全く分かりませんでした。部屋は長女の使っていた部屋があったので、寝具だけ少し新調したぐらいで、後は来てから必要なものがあれば用意するようにしました。サラの到着が一日遅れ、ホテルに直接迎えに行ったので、ウェルカムボードなどは使えませんでしたが、思ったより自然に会話ができました。

【学校生活】

こちらに来る前に、制服を着たいかを確認すると「着てみたい」というので、娘の先輩にお借りして準備しました。娘は小樽から札幌に通っていたので、朝がかなり早く、カナダでは自分の車で学校に行っていたサラには電車、バスの乗り継ぎは疲れたようです。日本の高校とカナダの高校では授業の受け方や選択の仕方もかなり違ったので、驚きも多かったようです

【日本での過ごし方】

お盆など大きな行事は終わっていましたが、小さなお祭りや花火大会に行き、日本的なお祭りを見せてあげました。娘が部活でどうしても休めないときが多かったので、私たち夫婦と三人で観光することもありました。何かを見るだけよりも、体験することが楽しいだろうと思い、小樽らしくトンボ玉作りやグラス作りをしました。日本に来たら一度は温泉旅館に連れて行ってあげたいと思っていたので、登別にみんなで宿泊し、本格的な懐石料理を体験させてあげました。朝食のあまりの多さに目を真ん丸にして驚いていたのが印象的でした。

【コミュニケーション】

日本語はひらがなと多少漢字も読めましたが、質問されたことを日本語で返すのは苦手なようなので、私は英語中心に話しました。父親は全く英語を話せないので、日本語のみで話しかけました。毎日ではないですが、夕飯のあとは食卓テーブルにみんな集まり、ノートを使っていろいろなことを話しました。英語の早口言葉、日本語の敬語の違い、サラの兄弟の話、サラの家の間取りなど、絵に書くと分かりやすく話が弾みました。

【食事】
　最初のアンケートでは食べられないものはないと書いていたのですが、カナダでは食べたことがないものが沢山あるということがわかりました。特に海産物は普段の食生活ではほとんど食べないので、得意ではないようでした。朝食は、サラの朝の調子によってご飯を一緒に食べたり、シリアルで済ませたりと自分で選ばせました。お弁当は娘と同じ日本食を持たせましたが、毎回完食してくれました。来てすぐのころ、日本の暑さで体調を崩し、何を食べさせたらいいのか本当に迷いましたが、カナダではスープを飲むと教えてもらい、それを作りました。

【帰国】
　たくさんのお土産でカバンをぱんぱんにしながら荷造りしましたが、台風で帰国が遅れ、楽しみにしていた感謝祭のパーティーに間に合わなかったのが本当に残念そうでかわいそうでした。ただその数日間の空いた時間で、近所の散歩をして素敵な写真をたくさん撮って過ごしてくれたのがありがたかったです。偶然にも、娘の修学旅行の出発と、サラの出発が一緒だったので、お見送りできたのは嬉しかったです。「カナダで待ってるね」と言って笑って帰国しました。

【留学準備】
　カナダでは現金はほとんど使わないとサラに聞いていたので、カナダドルは本当に少しだけにしてあとはＶＩＳＡのプリペイドカードを二枚、生活費とお小遣いとに分けて持たせました。スーツケースはＬサイズとMサイズの２つを用意して、余裕と思っていましたが、寒さ対策のかさばる服が思ったより場所をとり、荷物を減らさないといけないくらいでした。クリスマスがあるのでプレゼントになるようなものも多めに持たせたので、ますますかさばりました。

【エドモントンでの生活】
　行く前は、両親が共働きで忙しいということだったので、二人で夕食を食べることになると聞いていましたが、娘がいる間はサラのお父さんが早く帰ってきてくれて、おいしい夕食を毎日作ってくれたそうです。サラのお家はWi-Fiが通じなかったので娘との連絡は学校に行っている時間に限られ、時差の関係で通話は一度もしませんでしたが、LINE のやり取りで十分楽しく過ごしていることは伝わりました。スキーにも二度連れて行ってもらい、クリスマスと新年はサラのおじいさんのお家で大家族に囲まれて迎え、本当に映画のような体験をさせていただきました。

【パートナー】
　日本にいる間、娘が部活で一緒にいられないことも多く、土日は特に退屈な時もあったのではと思いますが、カナダでは本当に娘の滞在を楽しくするために助けてくれたと感じます。サラの友人もみな和花をやさしく受け入れてくれて、人の温かさを感じられたようです。

　４ヶ月間、お互いがお互いを思いやって過ごせるようなパートナーと合わせていただいたおかげで、得難い経験をできたと本当に感謝しております。
　お世話になった方々に、この場をお借りして改めてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

令和元年度　高校生交換留学促進事業に関わる研修報告書

北海道苫小牧東高等学校　保護者

[はじめに]

海外留学をしたいという娘の意志は、説得力のある成績と学習姿勢を見ていて、もしも留学のチャンスを与えられたら全力で応援してあげたいと思わせるものでした。

道から 10 名のみが参加できるプログラムであることもあり、選ばれた時は家族全員で喜びました。

[事前準備]

受け入れに関しては部屋の片づけをして、布団やバスグッズ、タオル類の買い足し準備をしました。

娘の準備はスーツケース、デビットカードの申し込みを早めに調査、申し込みをしておきました。

受け入れの 1 週間前の日曜日の朝、フェイスタイム（テレビ電話）でお互いの家族全員で自己紹介や好きな食べ物、嫌いな食べ物など質問しあったり、家の中と部屋を見せ合ったりしました。

[留学生お迎え]

予定では空港へ出迎える予定でしたが、台風の影響で千歳のホテルへのお迎えとなり、想定外のことに少しとまどいながら、緊張の初対面となりました。

すぐに必要なもので足りないものはないか確認しあい、学校の上靴を買いに行ったりしました。

[日本での生活]

到着日の翌日、町内会の盆踊りがあり、さっそく日本ならではの経験ができる事に喜びました。記念にということで特別にやぐらに上らせてもらいました。

和太鼓を叩いてもいいよと仰っていただいたのですが、照れて遠慮していたようです。その夜は花火もしてとても楽しんでいました。

始めは全く日本語が分からない子とどう接していいか考えましたが、日本語を学びたいナミーの為に基本日本語で日常会話し、わからない言葉のみ英語でという対応をしていました。

彼女はとても勤勉で日々新しい日本語を覚え、ルールや習慣など毎日新しく覚えたことを楽しそうに教えてくれました。

ナミーと娘は共通の特技がダンスということもあり、放課後活動のダンスも一緒に過ごすことができたため、100%通学を共にでき安心でした。

週末は出来るだけ家族で出かけたかったのですが、仕事の都合等でなかなか毎週末までとはいきませんでしたが野球観戦や小樽観光、ミュージアム、動物園などへ行きました。

娘が単独で用事があった日は、私と２人で何度か映画を観に行きました。

ナミーのお母さんへ line で写真とエピソードを毎週末やり取りしていました。

[日本での食事とアレルギー反応]

主食に関してはカナダでも米飯が好きで、特にパンやシリアルなど特別に用意しなくてよかったのですが、ナッツ系アレルギーがあるとの事でしたので気をつけていました。

外食をする時もナッツ類を含んでいないかを確認してから注文していましたが、カレー屋さんに行った時にアレルギー反応が出てしまい病院に行くか迷い、ナミーのお母さんへ連絡を取って判断を仰ぎました。翌日は胃痛の為、学校を欠席し自宅で経過観察しました。

幸い大事には至らず、普段アレルギー反応が出た時に飲んでいた薬を持って来ていたので良かったです。アレルギー反応の症状を見たことがなかったので驚いてしまいました。

うどんと天ぷら、キムチがお気に入りで、飲み物は水を常に持ち歩いていました。

[留学生見送り]

帰国予定日、再び大きな台風の影響が出てしまい、帰国まで数日伸びてしまいました。お土産をたくさん購入し、荷物もまとめ、スーツケースの重さも何度も確認し準備万端だったのでがっかりしていました。

しかも、出発日延期になったので、娘は修学旅行でいなくなってしまい、残りの家族で空港へ送る事に。

最後の日ナミーと２人韓国ドラマを観てワイワイ女子トークをして楽しい思い出が出来ました。

[カナダへ]

こちらの写真とエピソードを毎週送っていたため、あちらでも同じように連れて行ってくださった場所での写真とエピソードを毎週末送って下さいました。その為、カナダでの様子がとても分かり安心できました。

娘とも時差の都合で長くやり取りできないものの、line のやり取りで体調や困ったことはないかなど、遠く離れていても身近にいるように話すこともでき、この時代に海外へ渡航しても不安は少ないと感じました。

[最後に]

今回の交換留学プログラムへ参加させていただけたことで、我が家にインターナショナルな風が現実的に吹き込まれ、娘も改めて将来への職業選択や、生き方そのものの視野が確実に広がり今後も積極的に海外へ目を向けて活かしていけると思います。

北海道教育庁の職員の皆様、引率していただいた先生、苫小牧東高等学校の諸先生の激励とご指導にお礼申し上げます。ありがとうございました。

留学生受け入れ

北海道登別明日中等教育学校　保護者

□事前の準備

留学生の二カさん、お母さんとメールのやり取りは７月ごろから始めた。彼女に食事で気を付けるべき持病があったので食生活、その他の生活で気を付けることをやり取りした。学校のことは子供同士で連絡し、家庭では生活のことを中心に写真を送ってイメージできるよう心掛けた。彼女の部屋にはベッド、タンス、机を用意した（家族の使用していたものを利用しました）。
確認したこと：食事で食べられないもの、薬のこと、日本での生活リズム、水泳をしていたので近所のプールのこと、持ってくるスマートフォンがSIMフリーかどうか（確認したがSIMフリーではなく、スムーズに移行できませんでしたが…後述します）、電車で通学すること、学校で必要なもの（上履き用の靴は日本ではサイズがないので必須）、北海道内で行きたい場所（美瑛の青い池をリクエスト。早めに宿を確保できました）など

□ATM

来日して次の日にATMの確認をした。カナダの銀行のデビットカードを持参していた。彼女のカードは郵便局、銀行より、コンビニのATMの方が手数料が安かった。初めてお金を下ろそうとした時は上手くいかず、４日ほどお母さんとやり取りした。結局カナダの銀行での設定の問題だったが、カナダからのインターネット送金方法を銀行に問い合わせたり、時差がある中でカナダとやり取りしたり、彼女もお母さんも私も皆が不安だったが、解消した時には団結力が高まって、皆の距離が縮んで良かった。設定は海外出金ができないようになっていたらしく、設定変更後はカナダ時間で１日に１回、100C＄までの出金設定に変更された。日本での引き出しで２日連続して引き出す場合、カナダではまだ日付が変わっておらず引き出せないことがあった。

□スマートフォン

家ではWi-Fiを使用しており問題はないが、通学の行きかえりの連絡などでスマホがあった方が便利だということになり、SIMカードを購入することにした。カナダにいる時からスマートフォンがSIMフリーか確認した。SIMフリーだというので、IIJトラベラーズSIM（3か月、2G、3800円）をネットで購入した。さっそくSIMカードを入れ替えたが全くつながらず、困った。初めは本人に任せていたが、途中から確認するとPUK番号を適当に入力してロックがかかったようだった。ロック解除の手続きを電話やネットで調べたりして対応した。ロックは解除されたがやはり全く使えず、週末に札幌の大手家電量販店に行くことにした。家電量販店のカウンターで調べてもらったら、そもそもスマートフォンがSIMフリーではなかったことが判明。ポケットWi-Fiをレンタルするか、カナダのお母さんに確認させたところ、その場で新しいスマホを購入することになった（彼女の使用していた端末はお母さんのお下がり。液晶はバキバキで動作も遅かったらしい）。カナダでも使用できる端末で価格の安いものを本人が購入。カナダで購入するより安いらしく、帰国時には妹の分も購入していた。

□札幌

２週目の週末にスマホの件もあり、札幌に行くことにした。その際に２人の留学生仲間と会った。色々話せたのかうれしそうだった。その後も札幌に行って、他の留学生と会いたいようだった。家族の予定と会わず連れていけなかったが、一人でも行くといって少し困った。「大事なあなたを預かっているから、一人では行かせられない。責任があるの。」などと話をした。結局、札幌の留学生に予定が入り、札幌で遊ぶ話は流れて内心ほっとした。

□家庭で

８月、９月は暑くて身体が少し参っているようだった。６時起床、７時通学、19 時帰宅。慣れない環境で疲れたのか、初めは夕食後、部屋に入るとそれっきり出てこず、見に行くと寝落ちしていることもしばしばだった。夕食後に早めにシャワーに入るように勧めたが、朝のシャワーの習慣があり、なかなか入浴しなかった。初めは湯船も入らなかったが、入浴剤をあれこれ買って、彼女に入浴剤を選んでもらうようになってからは楽しんで入るようになった。

カナダでは洗濯は大きな洗濯機で週に１回、洗濯するらしく、なかなか洗濯物を出してくれなくて困った。彼女の部屋に洗濯籠を置いて、制服のブラウスや部活で使用したもの、下着など入れてもらうようにしたが、それでもなかなか出さなかった。一度、はっきり言った方が良いと思い、ここは日本だから湿気も多いし臭くなるよ！出しなさい！と叱った。カナダでもお母さんにいつも言われていると、ニヤニヤしながら教えてくれた。部屋の掃除や洗濯ものの畳み方なども教え、土曜日は部屋の掃除とシーツの洗濯の日と称して皆で掃除した。

お手伝いもあれこれ考え、一緒にしたが、早く休みたいようだった。平日は疲れていることもあり、無理強いはしなかった。文化の違いというより、家庭の習慣の違いも大きかった。

日本語はほとんど話せなかったので、家庭の中では英語で話すようにした。日本語で話していても、誰かが通訳して（下手な英語でも！）、彼女が疎外感を感じないようにした。ニュースなど二か国語のものはバイリンガルで見るようにした。娘がカナダに行けば、結局英語で話すのだから、ともかく英語で話してみるという良い練習になったと思う。ラグビーのワールドカップも開催されており、言葉が分からなくても共有できるＴＶ番組を多く見たように思う。

□観光＆遊び

うちの子供たちは部活が忙しく、なかなか土日に一緒に出掛けることはなかったので、週末は私と夫と留学生という組み合わせが多かった。

インドからの留学生が同時期に学校に来ていたので、２人を連れて登別温泉に行った。足湯や噴火口の見学は２人の留学生とも楽しんでいた。なんといっても伊達時代村はとても楽しいようだった。忍者のコスプレグッズをたくさん購入していた。やはり温泉は入るのには抵抗があり入らなかった。

白老ポロト湖でカヌーに乗ったときはカナダではとても一般的だと言っていた。カヌーを漕ぐのが上手だった。海岸の散歩が嬉しそうだった。カナダでは内陸の方に住んでいるので海は新鮮なのだろう。

リクエストにあった美瑛の青い池に３連休を利用していった。あらかじめ予定を立てておいたの

で、スムーズに楽しめた。夜、満天の星に一同感動してよい思い出になった。温泉にもチャレンジしていた。

その他、小樽観光や果物狩りなど計画はしていたが実行には至らなかった。留学期間中、週末は8 回しかないのでメインの観光はあらかじめ決めておくと良いかもしれない。遠くに行かずとも、クラスの子とカラオケやボーリングに行ったり、試合の応援に行ったりすることも留学生たちにとっては楽しいことであるように思う。

家族の通院があったので、苫小牧イオンで半日、一人で買い物をして過ごしたりしたこともあった。洋服を見るのが好きなので、たくさん洋服を購入していた。「一人にしてごめんね」と言うと、「マイペースで見られるから、楽しいし、大丈夫」と言っていた。帰りに、古本屋に行くと漫画を大量購入していた。日本のアニメや漫画はカナダでも人気で、それが安く手に入るから喜んでいたようだ。

□食事

胃腸が弱くケールが食べられないとのことだったが、日本では比較的好き嫌いなく何でも食べてくれてほっとした。ケール以外は大丈夫、といってはいたが、カナダでは普段食べないケールに似たモノ（=繊維が多いもの）には注意した。ゴボウやこんにゃくなどは出さないようにした。刺身は良かったが、煮魚は苦手そうだった。我が家では朝は和食なのだが、シリアルも用意した。比較的和食を食べていたが、たまに変わったシリアルを買ってくると、すごく喜んでいた。日本のお菓子は大好きで、通学の帰りによく買うらしく、部屋に持ち込んで食べているようだった。毎週土曜日に、ケーキなどスイーツを食べながら今週あったことを家族で話す時間を設けた。一緒にスイーツを買いに行ったり、こっそり二人でソフトクリームを食べたり、彼女との時間を大事にして、家でリラックスできるように心がけた。

□健康

持病のために自分で注射を持参し、２週間ごとに打っていた。持病が悪化しないように食生活には気を付けた。また、突然に悪化した時のために、最寄りの大きい病院（苫小牧市立病院や王子病院）に行けるようリサーチだけはしておいた。カナダでは水泳のスポーツクラブに所属していて、近所のプールにいって１時間ぐらい一人で泳いでいるときもあった。

途中、足の炎症や靴ずれで市販の薬を使うこともあったが、薬のことなので効能や成分を写真に撮って、翻訳ソフトで英文にし、使用してよいかカナダの家庭に確認してから使用した。

□通学

通学は、自宅から最寄り駅までは車で送迎した。学校の最寄り駅から学校までは自転車で通学した。朝は、娘と通学し、帰りは一人で帰宅する時もあった。

□学校

日本語は「おはよう」「ありがとう」と覚えてきた自己紹介だけだったので、本人は学校の授業が理解できず大変なようだった。学校は体育や調理実習など日本語が出来なくても参加できる授業や、

日本語の自習時間、カナダの学校から出されている課題に取り組む自習時間を設けて対応してくれていたが、３週間が終わったときにじっくりと本人と話をすると、学校自体は楽しいが授業時間は辛いようだった（カナダから持参していた英語の本をすべて読み終えて読むものがないから、札幌に買いに行きたい。自習時間や授業中も英語の本を読んでいれば大丈夫。日本語は上達しなくてもよい。留学中はこれでいい。バトミントン部の部活は楽しい。美術部は楽しい。朝、早いのがつらい。食事は大丈夫などなど）。学校の担当教諭とは毎日のように話す時間が設けられてはいたが、シャイな性格なのか自分の要望を伝えられないでいるようだった。日本語のテキストをプレゼントして、毎日 30 分一緒に勉強しようと提案したが、初めの一日だけで終わってしまった。日本語学習を無理強いするのもかわいそうで、学校と相談した。ALT のアシスタントとして英語の授業に参加させてもらえてからは次第に元気を取り戻していた。ちょうどインドからの女子留学生が学校に来て、同世代の女子と遠慮なく英語で話ができるようになってストレスも軽減したように思われた。家族とも打ち解け、学校でのスピーチを一緒に練習したりするようになった。球技大会、体育祭など行事はすごく積極的に参加し、楽しんでいるようで安心した。

□来年度の方へのアドバイス

　留学生は環境が大きく変わり、２－３週目で疲れが出てきます。日本の家族とあまり話さず、スマホで向こうの友達と連絡を取りたいときもあります。体は大きくてもまだ子供なんだな、と思う時がままありました。私たちも３週目ぐらいが一番大変でした。ここは譲れないと思うところはしっかり話しをしましたが、あとは「健康で楽しく過ごしてくれれば何より」と思うようになりました。違いを楽しめるようになるといいですよ！

カナダへ留学

□夏休み中に準備しておくこと：デビットカード（案内では 10 日ぐらいで作れる、と書いてあるが 3 週間ぐらいかかった。留学に間に合うか心配した！）。カナダ入国の書類（早めの準備がベスト）。歯医者など。

□あってよかったもの・欲しかったもの：ヘッドフォン、箱テッシュ、生理用品、ちょっとしたものを干すハンガーやピンチ。水筒はマスト。スリッパ。クリスマス用のプレゼント（多めに。クリスマスパーティーに誰が来るか聞いて準備すると良い）。日本らしいカード（無地のはがきに日本らしいイラストを 50 枚印刷して持って行った。お別れの際にメッセージを書くのに役立った。）

□いらなかったもの：カイロ５枚あればよい、変電気、気に入ってない服はいらない、勉強道具は吟味して。スタディサプリなどオンライン授業は便利。とにかく乾燥している。暖房は温風が出る。日本のお菓子はあまりいらない。向こうのものを楽しんだ方が良い。電子辞書。パソコン。カナダでは Wi-Fi が充実しており、SIM カードは不要。

カナダ交換留学について

北海道函館中部高等学校　保護者

１．ライリーの日本での生活

朝のコールが階下からかかり、朝ごはんの準備をみんなでし、お弁当を持って自転車に乗って学校に行く、そんな生活でした。最初の数日は食べやすそうなメニューにしていましたが、大丈夫そうだったのでお弁当も特別メニューにせず用意しました。本当によく食べてくれました。カナダでは朝食抜きだったようですが、毎日ご飯、お味噌汁、おかずの日本食。自然な流れでご飯をよそう係になったので、毎回お釜を渡してやってもらっていました。

最初の一、二週間ほどは車で送り迎えをして、帰り道にちょっと観光したり、たい焼き屋さんに寄ったりしましたが、徐々に自分で自転車やバスを使って通学してもらいました。帰り道に、公園に寄ってみたりもしていたようです。何度か見かけたのですが、自分で自転車で通学するのもとても楽しそうでした。（カナダでは学校まで遠いので車移動だったようです。）

ライリーが学校から帰ってきたら、一緒におやつを食べ、お茶を飲みながら学校での様子を聞く時間をとりました。仕事から帰宅して夕食準備までの短い時間でしたが、どんな授業があったか、どんな内容だったか質問したりして過ごしました。普段周りの人は皆早口になりがちで、時にはライリーもついて行くのが大変かなと思ったので、二人でゆっくり話をする時間は大切にしました。

ライリーは予想以上に静かな子でした。積極的にコミュニケーションをとる感じでもない性格のライリーが交換留学をやってみようと思って日本に来ている、ということは、それはそれですごいことなのではないかと思いました。静かな子なので学校での様子が心配だったのですが、昼食は友達と一緒に食べたりしていたようです。娘は自分がお世話をしなければ…という気持ちだったようですが、兄弟が外への散歩へ誘ったり、バスケやろうと連れ出してくれたりしましたので一人でめんどうをみなければならないという感覚が少し軽減され助かりました。

言葉は、始めの二週間ほどは、こちらの日本語がわからず険しい表情をすることもありました。最初は、日本語で伝わらないときは、英語を使って説明を加えたりしていましたが、ライリーが日本語で返してくるので途中からはほぼ完全に日本語でした。「大丈夫」「またね」…新しい言葉を使うようになっていく、語学の習得の変遷がみられて面白かったです。日本語は本当に上達しました。弟たちも、わからないときに英語で教えてしまうのではなく、様子を見ながら適度な手助けをするようになっていき、成長したと思います。（中耳炎になって耳が若干痛い時も「大丈夫」と言っていたのは困りましたが…）

途中、私が風邪をひいて寝込んでしまい、ライリーを含めた子供４人で食事の用意をしたり、片づけたり、洗濯ものをしたりとしてくれて本当に助かりました。

バスケ部には数回参加しましたが、上靴用に持ってきた靴がスニーカーだったため、あわてて運動靴を買いに行きました。30ｃｍの靴を特価で見つけることが出来てとてもラッキーでした。

こちらの子供が三人、テスト、部活、大会等あり、あちこち一緒に行けなかったので、母や父がどこかへつれだすことが多かったです。父とは大沼でカヌーをしたり、西部地区での散策で人力車に乗ったりもしました。母とは函館山、（海をほぼ見たことがないとのことだったので）戸井の水な

し温泉、ハイキングが好きだというので恵山に登山など、近場に出かけました。海では、足を水に入れて波で遊ぶ様子が、とても楽しそうでした。弟たちのバスケや柔道の試合を見学しに行ったりもしました。ＢＢＱをした時は、弟たちの友達と家の前でバスケをしたりおしゃべりをしたりしました。英語の成績が悪いと話している子が好きなバスケットの話題でライリーにがんばって英語で話せている様子は、心温まる感じでした。彼にとっても、自分の英語で会話をしたということが学校での成績とは違う自信につながったのではないかと思います。

留学生が来たら行きたいと思っていたのが、家族みんな好きな伊達時代村でした。洞爺湖一泊旅行として行きました。洞爺湖では部屋からの花火、意外と抵抗感なく入った温泉、そして登別の地獄谷の散策、時代村とあちこち見て歩きました。

修学旅行は、京都、奈良、東京に行きました。しかし、途中で中耳炎が判明し、別行動になった部分もありました。引率の先生方には手間をかけさせてしまいましたが、友達とグループで行動することも出来、本当に感謝しています。

千歳への見送りの際、台風の影響で飛行機が欠航となり、私たちホストファミリーは千歳空港に連れて行って別れを言ったものの、ライリーたちは札幌で出発便を待って数日過ごすことになりました。子供にとっては、おまけの観光付きのような、同じように異文化を体験した者同士、体験を共有、語り合えたのは良い時間だったのではないかと思いました。

２．カナダでの生活

娘の行ったビショップキャロルはカナダの学校の中でも変わった学校であり、毎朝行くクラスや授業がない大学のような高校であったようです。お昼ご飯を食べる友達はできるのか…と心配しましたが、積極的にカナダでの生活を過ごそうという娘自身の目標からも学校生活に溶け込むことができ、日々、会うと声を掛けてくれる友達、一緒にご飯を食べたり遊びに行く友達もできたようでした。

娘からの最初の連絡は、カナダについてすぐ「洗濯が週に一回だって！服が足りなくなるかも!!」というものでした。少し買い足したのと、自分で洗濯をするようになったのでなんとかなったようです。お互いの連絡は、ＬＩＮＥで週に３回ほど、ストレスが溜まらない程度に、でもせっかく英語漬けになりに行ってるのだからそれを邪魔しないよう、と思いながらやりとりしました。

お世話になった家族には、バンフ国定公園、スキー、クリスマスには祖父母の家での滞在に連れて行ってもらったりと、楽しく過ごさせていただきました。

お金は、デビットカードを用心のため二枚作り、現金と合わせて持たせました。カナダではカードの方が便利なようで、現金はだいぶ持って帰ってきました。

ライリーやライリーの妹とよく家のベランダにあるジャグジーに入っておしゃべりを楽しんだようです。ライリーとは、日本に来る前、それほどやり取りがなく返信があっても、最小限の内容で、他の子たちがパートナーと連絡を取りあっていることを聞いて焦るくらいでした。彼が日本に来てからも、言葉の不自由さがあったせいか、自分からそれほど発信しない印象でした。しかし、カナダに行ってからは、彼の妹ともいい関係になり、冗談を言い合えるとてもいいパートナーとして過ごすことができたようでした。ライリーの妹には、花が来るまではこんなにライリーと話をすることはなかった、ということを言われたようです。

娘の最終日、娘の部屋にライリーとライリーの妹が来て、パッキングを見ながら、娘にちょっかいを出しながら、去ることを惜しんでおしゃべりをしていたというお土産話が、三人の仲良くなった関係を表しているようで温かい気持ちにさせてくれました。ご両親、ご家族にはただただ感謝の気持ちしかありません。こちらと留学生の関係についても、一人一人個性も相性も違うのでその子を認める、否定せず受け入れるということも必要なのかな、と思いました。うちの家族としては来てくれたのがライリーで本当によかったね、の一言でした。

３．課題

受け入れているとき、修学旅行参加費用の支払いについてのやり取りは大変な部分がありました。ライリーのカードには送金限度額があるということで、送金不正防止の諸手続きを経て私たちの個人口座に一度送金してもらい、そこから旅行代理店に支払いました。もう少しスムーズな方法がなかっただろうかと思いました。

カナダの学校に入るときに、ライリーの両親より出生証明書が必要と出発前の２、３日前に言われた時は慌てました。何とか似た書類があり、持って行かせて実際手続きのときに提出したようです。

４．最後に

今回の受け入れに際して、クラスメートのさりげないサポートが助かりました。街で見かけたときに、声をかけてくれたり、修学旅行での自由行動のグループにスムーズに入れてくれたり、送別会をしてくれたり、と本当に感謝しています。家族に対しても、弟たちがそれぞれ大きく文句を言うことなく、がまんしたり、協力してくれていることがあると気付く機会があったことで、家族、お互いに対しての感謝の気持ちが改めて生まれました。

今回は、カナダからの到着から始まって天候の影響で旅程がスムーズにいくかどうかとても心配がありましたが、道庁の担当の住吉さんに本当にお世話になりましたし、細やかな配慮を頂きました。

最後になりましたが、本事業の運営をして下さった北海道庁の方々をはじめ、函館中部高校の先生方、クラスメート等お関わりいただいた全ての方々の協力により無事に終えることができたと思います。心より感謝申し上げます。

令和元年度　北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業報告書

北海道旭川北高等学校　保護者

はじめに、このような大変貴重な事業に参加させていただきありがとうございました。この計４ヶ月間の経験は、娘にとり一生忘れられなく、二度とない体験学習となりました。特に留学先においては、様々な国からの留学生もおり、多くの異文化交流を積極的に図ることができました。初めは、自分の英語が間違っていないのか？通じるのか？と弱気だったようです。しかし、会話を重ねていくうちに「話すことで間違いに気付ける！」「もう日本でも躊躇なく英語で話しかけられる！」とスピーキングにも自信を持ち、自分を出していける力を高め、帰国することができ頼もしく感じております。

また、親としましても、今回娘が広い視野を持ち成長できたように、多様な価値観を知り、広く受け入れることができるよう心がけていきたいと思います。

１　受け入れ準備

エミリーと娘の交換留学が決定後、二人はメールで連絡を取りました。しばらくしてからは、SNSでのやりとりもするようになりました。乳糖不耐症という報告について、食事制限の程度の確認をしました。部屋は、ベッド・机・姿鏡・備え付けのクローゼットを使用してもらいました。好きなカラーを聞いていたので、寝具の色はエミリーの好きなブルー系にしました。

制服は学校で準備をしていただけました。上靴は本人に準備してもらいました。

旭川へ到着後は、本人の希望がありすぐに家電量販店へ行き、スマートフォンのSIMカードを２か月間で手続きをしました。持参のパソコンでインターネットを使えるようにし、また、私たち家族との連絡手段として、ラインアプリをインストールしてもらいました。

２　エミリーとの生活

台風のため一日遅れて我が家での生活が始まり、一日あけてすぐの通学になりました。自宅から学校までは１，５キロほどであり、初めの２週間は車で送迎しましたが、その後は娘と二人で自転車通学をしました。

エミリーは少し緊張してしまうタイプでしたが、娘のテニス部以外にも、バトミントン・陸上・茶道・科学実験・英語など様々な部活にチャレンジしました。

日本語は１週間目で初めて「疲れた」と言葉にし、その後は、ただいま・いただきます・おはよう・おやすみ、と簡単なあいさつのみ話していました。娘とはずっと英語で会話をしていました。私たちは、調べながら英語で話しかけていましたが、３週間目頃より毎日使うような会話は日本語にしました。

エミリーは気分の浮き沈みがあったりなど、常に娘と良好な関係とは言えないながらも、夕食後には皆でトランプ・ウノ・カードゲームをして遊び、カナダにはないカラオケに娘と行き、コミュニケーションを図りました。その他余暇時は、インターネットで映画や音楽、カナダの友達・両親と電話をしたりして気分転換を図り過ごしていました。

食事は、白米・サーモン・えび天ぷら、パン・フルーツが大好物でした。ラーメンやうどんも好みました。野菜はシンプルなスティック野菜以外は苦手でした。カナダではお昼休みに一回でお弁当を食べるというよりは、お腹が空けば自由に授業中にでも飲食をしている。と聞いたので、お弁当・おにぎり・パン・フルーツなどを組み合わせ休み時間に少量ずつ食べれるようにしました。お箸の練習をしてきており箸のみで上手に食べていました。飲み物は、普段も毎日飲んでいるというオレンジジュースや、日本に来てからは三ツ矢サイダーがお気に入りでした。

外出・旅行には、花火大会や食べマルシェ、富良野・札幌・ニセコ・小樽・ルスツなどに行き、私たちにとっても良き思い出になりました。４泊５日の関西・九州への修学旅行にも行き楽しんできました。

３　カナダ留学準備

パスポート申請、海外旅行傷害保険の加入、クレジットカードの作成、eTA 登録、外貨両替、海外でのスマートフォン使用についての確認など。ホストファミリーやクラスメイトへのお土産や持ち物の準備をしました。

４　カナダでの留学生活

学校生活では、フード・体育・音楽・日本語クラス・留学生用の英語クラスを専攻し、日本とは違うスタイルの授業をとても新鮮に受け、充実し楽しめたようでした。日本に興味をもってくれる生徒も多く、友達になり一緒に出掛け遊ぶこともできるようになりました。

ホストファミリーには、とても優しくしていただき、可愛がってもらうことができました。カルガリー・エドモントン・バンフなど色々なところへ連れて行ってもらい、楽しみと感動の日々を送ることができました。ホストファミリーとの別れは辛く、帰りの飛行機では涙が止まらなかったようでした。

最後になりますが、本事業の運営をしてくださった北海道教育庁の皆様をはじめ、担当教員、日本・カナダ両高校でお世話になりました教員・生徒の皆様、ホストファミリー、全ての関係者の方々へ心より感謝申し上げます。

令和元年度高校生交換留学促進事業　報告書

北海道帯広柏葉高等学校　保護者

娘がエドモントンから帰ってきて、私たち家族の約半年にわたった交換留学への取り組みも、終わろうとしている。この機会を与えてくださったことに感謝しながら、振り返ってみる。

① 交換留学が決まるまでの経緯

娘が漠然と留学したいと思っていることは以前から聞いていたし、親として賛成してはいたが、どの時期にどこの国へと考え始めると、具体的になかなか話が進まないまま数年たってしまっていた。ところが、娘が高校２年生になる春休みにカナダ・アルバータ州の交換留学の募集を学校で聞いてきてからは、どうしてもこれに応募したいと、あれよあれよという間に自分で応募用紙にいろいろと書いて提出していた。以前にもこのプログラムでアルバータの生徒を受け入れ、自校の生徒を送り出してきた、経験豊富な英語科の黒田先生のアドバイスも大きかったようだ。後々、黒田先生には、留学生の学校でのことはすべて任せてください、お母さんは家での生活だけを心配してください、と言っていただき、その言葉の通り、学校でのことで心配したことは１つもなかった。これで肩の荷は半分以上軽くなった。

② 受け入れまでの準備

交換留学が決まってから一番最初にしたことは、娘はパートナーの Rodrigo に、私は Rodrigo のお母さん Cristina に連絡をとることだった。メールで連絡をとったが、後からそれも煩わしくなり、日本の LINE のようなアプリ、WhatsApp を介してトークしていった。しかし、英語でのトークは、慣れない私にとってとてもストレスだった。言いたいことを英文にして考えるのに時間がかかり、LINE のようにポンポンと会話が続かないからである。Cristina もそれは理解してくださって、辛抱強く付き合ってくれたと思う。一度だけビデオ通話で顔も合わせることもできた。

今そのメールや WhatsApp を読み返すと、最初はお互い質問攻めであった。内容としては以下のようなことであった

＜Cristina から＞

- 学校の制服は必要か？
- 留学中の気温、気候
- 空港からの距離、出迎えの日程（ホテル宿泊の有無など）
- SIM カードの入手方法、Wi-Fi 環境
- 娘が食べられないもの、アレルギー等
- メキシカンフードを食べたことがあるか？（パートナーはメキシコからの移民）

＜こちらから＞

- Rodrigo の食べ物アレルギー、体の状態
- 朝食のメニュー、Rodrigo 用に特別に何か用意したほうがいいのか

・洗濯は自分でやるか、私が洗っていいのか
・娘の所属する新聞局の活動に参加するかどうか

様々なやり取りをしたが、お互い気になったのは気候や気温で、寒いのか暑いのかによって、持っていく服にも関係したため質問し合ったが、こればかりは体感温度の差もあるため、つかみきれなかったと思う。

特に十勝は暑いときは 35℃近くにもなり、10 月の帰国する時は初雪の降るころで Rodrigo がそれをどうとらえるのか、わからなかった。ただ、Rodrigo の部屋をどうするかは Cristina に決めてもらった。小さいけどエアコンのある南向きの部屋と、少し広いけどエアコンのない北側の部屋。Rodrigo は南向きの部屋を選んだ。

他に Cristina が気にしたのは登校の服装だと思う。娘の通う高校に制服はあるが、普段は私服での通学なのでその旨を説明した。特にアクセサリーや奇抜なファッションは日本の高校生は着用しないと説明したが、その心配は全く必要なかった。デニムにパーカーやＴシャツといったごく普通のカジュアルな恰好で通学してくれた。上靴についてもカナダにはないものなので持ってくるようにお願いした。Rodrigo はカナダの高校で体育の授業も選択していないようで、日本では体育の授業が必修でジャージを着用するという説明が必要だった。実際はスウェットパンツを履いて体育の授業を受けていた。

また、娘は毎日放課後、新聞局での活動に参加していたので、慣れるまでは Rodrigo も一緒に参加して、一緒に帰ってきてほしいとお願いしてあった。帰国前の 10 月初旬には新聞局の研究会（札幌）に３泊４日で参加することが決まっていたので、顧問の先生にも配慮いただいているので一緒に参加しませんか、とお誘いもしておいた。この新聞局の行事のほかにも、家族旅行など大体のスケジュールをあらかじめ Rodrigo と Cristina に伝えることが大事だと思う。それに応じて費用の相談もできるし、カナダから持ってくるお土産なども考えているようだった。

このようなメールのやり取りと並行して、我が家に受け入れる準備をしていった。具体的には部屋の用意で、娘の部屋を空けるのに引っ越ししたり、寝具やタオルを買ったりした。ほかに買ったものは、お弁当箱、水筒、お箸、といったものだ。一番大きな買い物は意外にも物干し台で、男の子の洗濯物の量が想像できず、大きめのものを買って部屋に備え付けた。また、冷蔵庫の中の食材のストックも少しずつ増やしていってお弁当や食事の用意をした。

最後まで頭を悩ませたのは、空港で迎える際のウェルカムボードだった。事前研修会で見せてもらった昨年の写真ではとても立派に手作りされていたからである。これは娘の発案で、同じ高校に通う幼馴染の書道部の男子生徒に画用紙いっぱいの大きな筆字で Welcome　Rodrigo と書いてもらった。娘はその用紙に、日本の国旗やメープルリーフの模様を描いてカラフルにした。これはとても立派なウェルカムボードとなり、Rodrigo が滞在中ずっと部屋に飾られ、今はカナダの Rodrigo の家に飾られている。

６月の下旬に行われた事前研修会はとても勉強になった。昨年、留学生を受け入れた時のお話、特に食べ物について苦労された話や、こちらから子供にお金をどのように持たせたかなど、具体的な話が聞けて、留学がもうすぐ現実のこととなるとはっきりと意識できた。どの家庭のお子さんも立派に英語で挨拶していたし、その親御さんもしっかりと留学生を受け入れることができる

ように見えて、わが身を顧みて焦ってしまったこともよく覚えている。その場では誰とも連絡先を交換しなかったので、もう少し積極的に情報交換の場を求めた方が良かったと後から思った。

③　Rodrigo 来道

台風の影響を受けながらも、やっと Rodrigo を千歳に迎えに行くことができた。エドモントンの空港で出発する時の写真が Cristina から送られてきていた。ホテルのロビーでその写真と同じ彼を見つけた時、心の底からよく来たね、やっと会えたねと声をかけることができた。用意したウェルカムボードを持って撮った写真は、とても思い出深い記念写真となった。

④　Rodrigo との生活

Rodrigo はお祖母ちゃんが日本人というクォーターだったし、２年以上学校で日本語を学んで来ていたから、こちらがゆっくりと話す言葉は大体わかっていたようだった。英語で話しかけても、一生懸命日本語で返そうとしていたので、家ではほぼ日本語での会話となった。ゲームや日本のアニメが好きとのことだったので、それらが最初の会話のきっかけとなった。

５時半に起きて、ＪＲと自転車で学校に通う毎日が始まった。カナダでは両親が車で学校まで送ってくれていたから、この登下校は相当に体力がいったと思う、２か月よく通ってくれたと本当に感心した。学校での授業を受けて、娘と一緒に新聞局の活動に参加して帰ってくると大体夜の７時台。食事、お風呂と済ませて９時過ぎには寝てしまうという、あっという間の１日だった。

その体力を支えるのは食生活だ、と私たちにできるのは食事でサポートすることと心を決めて、家ではいろんなものを作ったが基本的にいつもの普通通りの食生活のままだった。朝ご飯はご飯とお味噌汁、つくだ煮のようなご飯のお供、ふりかけ、目玉焼き等々。パンの時ももちろんあった。お弁当も足りないのだけは避けたいと、おかずの種類もご飯の量も、娘のものより豪華になった。Rodrigo はほぼ何でも美味しいといって食べてくれたし、アレルギーもなかったので、その点では本当に助かった。苦手なのは納豆と梅干、それ以外は全く問題がなかった。たまに私の休憩もかねて、コンビニでお弁当を買ってもらうこともあった。エドモントンにもコンビニはあるようだったが、食べ物が充実している日本のコンビニを経験してほしかった。その日は娘と二人で選ぶ楽しさを味わってくれたようだった。

１日の終わり、お風呂の時間が Rodrigo は好きだった。カナダでは肩までお湯につかってゆっくりと入る経験がなかったせいか、とても気持ちいいようだった。そしてお風呂上りに、ダイニングテーブルに戻ってきて、用意したおやつを食べるのが日課となっていた。おやつは市販のもので、アイスだったり、ポテトチップスのようなスナック類を用意した。のちのち、おやつは甘いものが好みとわかり、かりんとうや鈴カステラ、クッキーをよく食べていた。飲み物は水がいいというので、魔法瓶に氷と水を入れてテーブルの上に置き、いつでも飲めるようにしていた。お風呂上がりのこのおやつの時間が、私たちのコミュニケーションの時間にもなった。今思うと、忙しい毎日の中で、この時間だけは皆で一緒に過ごすように心がけ、なるべくこちらから話しかけ会話するようにした。

⑤　Rodrigo との休日の過ごし方

最初の方の休日は、平日にできなかった洗濯や、自分の勉強をするのに時間を使ったり体を休めたりしたかったようだった。大型スーパーに行って、一緒に買い物も何度かした。実際に食べたいものを直接カゴに入れてもらったりして、好みを知ることができた。Rodrigo も並んでいるお魚、果物を見て新しい発見があったようだ。外食も積極的にした。２か月の間に、食べさせてあげたいもの（お寿司、ラーメン、豚丼、スープカレー、とんかつ、お好み焼き等々書き切れない）をホワイトボードにピックアップしておいて食べるたびに消していったそのリストも、最後は“うどん”を残すのみとなって終了した。蕎麦の町に住んで、季節柄もあり、うどんだけは食べる機会がなかなかなかった。

その他はあらかじめ、大体のスケジュールを組んでいたので、ほぼこちらの提案どおりに進んで行ったと思う。

季節柄、神社のお祭りや町のイベント等も多い時期でこれらに参加することが多かった。

旅行は一度だけで、連休を利用して娘の従妹たちが住む道東方面に出かけた。日帰りで札幌ドームに日本ハムファイターズの試合観戦もした。美術館に葛飾北斎展を見に行ったりもした。

一番困ったのは、娘の学校のテスト期間で、娘は家に残って勉強に集中。私たち夫婦で Rodrigo とどこかに出かけるとなった時だ。ドライブがてら富良野・美瑛方面に出かけたが、車中どうしても静まり返ってしまい娘の存在の大きさを実感した。

Rodrigo が帰国する時、一番思い出に残っているのは？との質問に、地元の町で行われた新そば祭りと答えてくれた。その日は、１年のうちで一番町が賑やかになる日で、新そばの屋台の食べ歩きができるお祭りだ。娘と Rodrigo の友達が遊びに来てくれて、会場では蕎麦を、家の庭で焼肉パーティーをした。焼肉パーティー用のおにぎりは娘と Rodrigo の二人で作って用意してくれた。地元の友達も加わり、食べ疲れたら部屋でトランプや UNO をして夜遅くまで遊んだ。この時のことを楽しい思い出と言ってくれて、私たちも喜んだ。

⑥　帰国

長くもあり短かった２か月も、最後にまた台風に振り回されて終わった。最後の数日は帰りたいのに帰れず、見ていてかわいそうだった。千歳空港で他のカナダの生徒に会ったとき、きっとホッとしたと思う。そしてその姿を見て私たちも安心して見送ることができた。

帰国する直前、日本で食べたもので一番美味しかったのはと聞いてみると、我が家での一番最初の食事、たこ焼きと答えてくれた。タコやソーセージ、チーズを入れて、たこ焼き器で Rodrigo もクルクルと作った、ウェルカムたこパー。では最後もそれにしましょうと、お別れの会もたこパーになった。今度はチョコレートも入れて、意外に美味しいと皆で美味しくいただいたのを思い出す。

荷物のパッキングはほぼ自分でしていた。スーツケース２個に荷物とお土産を詰めていた。私たちからは六花亭のカステラを持って行ってもらった。ほかに、この２か月の思い出の写真をアルバムにしたものを２冊作り、１冊は Rodrigo に持って帰ってもらった。（もう１冊を私たち用とした）今もそのアルバムを見ながらこの報告書を書いている。写真はスマホで撮ったものが大半だったが、それらをデータで送り簡単にフォトブックを作ることができるサービスを利用した。

なかなか安価で本格的にできて、帰国後 Cristina から喜ばれお礼の連絡をいただいた。

⑦　娘の留学とその後、この事業の参加を終えて

この留学の一番素晴らしい点は、交換留学だと思っている。Rodrigo を２か月受け入れて、その間、カナダの Rodrigo の家族と少しずつ交流してきた。娘がお世話になる家族のことがある程度わかっているし、２か月一緒に暮らしていたパートナーが待っていてくれると思うと、娘の留学は準備も出発した後もあまり負担は重くなかった。心配することはあっても、もう本人が何とか乗り越えてやっていくしか方法がないと腹をくくった感じだ。実際、娘はカナダでホームシックにかかって何度となく寂しい思いをしたようだった。しばらくはビデオ通話も LINE のやり取りも途絶えた。声を聴いたら寂しくなるからと電話もしてこなかった。しかし、その間の様子は Cristina から連絡が来ていたので心強かった。交換留学でなければこう思えなかったと思う。娘本人も、憧れていた英語圏の学校への留学やホームステイも、少なからず現実とのギャップに戸惑ったと思う。そんな中でも、留学する機会を得ることができて自分は恵まれていると自覚し、全ての経験を何とか良い方向に捉えようとする姿勢を学んできたようだ。英語力、コミュニケーション能力も伸びたとは思うが、その前向きな気持ちを持つことができたことが一番の成果だったと思っている。

我が家は一人娘とわたしたち夫婦の三人家族だったので、異性の Rodrigo にとっては少し寂しい滞在となったのではないかと、もっとこうすれば、ああすれば良かったのかなと思うことも多々あった。でも今、Cristina とお互いに言うことは、私たちはその時々の、できることをベストを尽くしてやったね、ということだ。二人とも無事に滞在を終えて帰国できた、それが一番よね、とも話している。Rodrigo を通してカナダという国を身近に感じるようになったし、Rodrigo の家族も日本のことを良く知ろうとしてくれた。そして、いつかアルバータか北海道のどちらかで再会しようと新たな約束ができたことも大きな収穫となった。

このような経験をすることができて、帯広柏葉高校の黒田先生はじめ、北海道教育庁の住吉さん他、関係してくださった皆さんに感謝申し上げます。

令和元年度高校生交換留学促進事業に係る研修報告書

北海道鹿追高等学校　保護者

【はじめに】

このプログラムに参加したいと息子に相談された時、反対する理由もなく応援協力する事にしました。受け入れが決まった時は喜び、その日が来るのをワクワクしながら待っていました。

【日本での生活】

日本に来てまもなくジョシュの誕生日だったので、家族で話し合いサプライズパーティーを開きました。丁度大学生の娘も帰省中で、娘の友人も参加し楽しみました。ジョシュはパーティーをとても喜んでくれ、プレゼントした甚平もすぐ着てくれました。

買い物に出た時は、ゲームと映画が好きという事もあり色々見てまわり、カナダと比べてゲームソフトなどがとても安いと喜んでいました。日本語の勉強をすると言って「君の名は」のDVDを嬉しそうに購入していました。甚平をとても気に入ってくれていた様で、カナダのお母さんにゆかたをお土産に購入していました。

日本の文化を学びたいとの事で、家にある神棚と仏壇に手を合わせたり、近くの神社に行きどういう事をするのか色々話しながらやってみたりしていました。

足湯や温泉にも行きました。何の抵抗もなく湯船に入り、「熱い！！」とは言いながらも温泉を満喫してくれていた様でした。

８月の休みのほとんどは息子の野球の練習試合や試合を見に行く日々でした。あまりスポーツに興味がないと聞いていたので野球観戦は退屈ではないかと心配していたのですが、息子やクラスメイトが出ている事もありとても楽しんで見てくれていました。この年は息子がとても活躍し奇跡が起きた年でした。ジョシュがラッキーボーイだったのかもしれません。

学校から帰って来てからは、ご飯を食べ、息子や友人達と体育館でバドミントンや卓球を楽しんだり、家でゆっくりTVゲームやテーブルゲームをしたりして過ごしました。

【病院】

ジョシュが風邪を引きました。咳をしていたので持って来た薬を飲む様に伝えると、「飲みたくない大丈夫」と言うのでしばらく様子を見ていました。咳をしていてもＴシャツ１枚で毎日過ごしているので上着を着る様に言うと、「必要ない、寒くない」と着てくれませんでした。そんな事を言い頑張っていたのですが、38 度以上の熱が出てしまいました。病院に行く事を勧めたのですが「行きたくない」の一点張りで、どうして良いのかわからず先生に相談した所、家に来て病院に行く様に説得してくれました。夜間病院に行き無事に受診しました。薬の説明を先生がすると泣きだしてしまい、なぜか訳がわからずにいたのですが、家に帰って主人とジョシュが話したときに理由がわかりました。カナダでは風邪で病院には行かない事、熱は冷たいシャワーをあびて下げる事、薬は副作用が強いので飲みたくない、抗生物質を体に入れたくないという事の涙だったのです。

この事を理解したうえで、主人がジョシュに、「今永遠（息子）が風邪で熱が出たら今日のジョシュと同じ事をした。今ジョシュは大切な私達の家族、心配だから病院に連れていった。」と話した所、

わかってくれた様でした。
　丸薬は飲み慣れていない様で苦しそうだったので、薬はシロップなどでお願いしたら良かったと思いました。ジョシュの価値観やカナダとの文化の違いにとても考えさせられました。
　学校は２～３日お休みしました。休んでいる間は主人も私も仕事を休めずジョシュが１人になるので、部屋でゆっくり寝ている事を約束して、主人と私で時間をずらして１回様子を見に帰っていました。先生も時間を決め電話で様子を聞き見守ってくれました。とても助かりました。受け入れ前に病気の対応をしっかり聞いておくべきだったと少し反省しました。

【食事について】
　朝は毎日ブラックコーヒーを飲み、たまにパンを食べていました。パンには練乳をたっぷりつけて食べるのがお気に入りの食べ方でした。
　昼はお弁当。息子と同じメニューで作っていたのですが、少しずつ苦手な物がわかってきたので別メニューで作っていました。お米がとにかく大好きで、白いごはんを沢山入れてほしいとリクエストされました。
　夜はなるべく日本食をと思い初めは煮物など出していたのですが、醤油、ソース、ケチャップ、マヨネーズが食べられないと聞き、あまり味付けをせずなるべく塩コショーで味付けして出す様にしました。必ず和と洋を作り、ジョシュが何も食べられない、という事のない様にしました。とにかく好き嫌いが多く少し苦労しました。
　外食ではラーメンがとても気に入って塩ラーメンをよく食べていました。他にはトンカツ、寿司（塩）、ピザ、マクドナルド（注文の時にソース類はすべて抜いてもらって）を喜んで食べていました。

【留学】
　大きなスーツケースを２個もって出発。たまに送られてくる写真や動画でとても楽しんでいる事がわかりました。日本の学校とは違い、授業を自由に選択でき内容も新鮮で、英語はあまりわからなかったけれど飽きる事はなかったと聞きました。仲良くなった友達と話がしたくて一生懸命英語を勉強した様で、少し会話が出来る様になっていました。学校にはいろいろな国の人達が居て、文化の違いなど沢山勉強になったそうです。
　学校以外では、ホストファミリーとクリスマス、お正月を旅行しながら楽しんだようで、バンフに行ってスノーボードを楽しんだりレッドディアでジョシュの親戚と過ごしたり、とても貴重な経験をさせてもらいました。

【最後に】
　日本ではあまり積極的でなかった息子がこのプログラムに参加した事をきっかけに自分の意見や考えをしっかり伝えてくる様になりました。またカナダに行きたいと言って、今では英語の勉強にと映画を英語で見ています。
　２ヶ月言葉のなかなか通じないところで過ごした事は息子にとってとても自信につながった様です。
　本当に参加させていただけて良かったと心から感じています。感謝しかありません。ありがとうございました。

令和元年度(2019 年度)高校生交換留学促進事業報告書

北海道釧路湖陵高等学校　保護者

高校の担任の先生に息子が英語が好きで留学したいという旨を雑談のなかで口にしたところ、先生がこの事業に関して話を進めていただき、はじめは驚きました。

アイザックは身長が１８０ｃｍ以上あり、大きめのベッドを用意するとともに、服の寸法を聞いて、上着はこちらでプレゼントしてあげました。ズボンは黒なので、アイザックに持ってきてもらいました。和室が空いていたので、鍵を取り付けました。アイザックは漫画が大好きで、ウェルカムボードにドラゴンボールやポケモンの写真をはって渡すと、大変喜んでくれました。

アイザックは日本語を話す・書くことが非常に上手で、食事の好き嫌いも早くに知ることができました。なので、特に会話の不自由はなかったです。食べ物は和食もよく食べてくれました。特におにぎりがすきで、お弁当にはほぼ毎日入れました。

家族の会話はすべて日本語で、英語を話すと「NO」と言いました。お菓子はメロンパンが大好きだったので毎日食べさせてあげました。

食事以外ではほとんど自分の部屋にこもり、大好きな「音ゲー」をして遊んでいました。思えば、朝昼夜、車の中ですらプレイしていたので、相当熱狂的なプレイヤーだったのだと思います。不思議なことに、アイザックは滞在中に彼のしている音ゲーのチャンピオンにも釧路であっていました。息子の話では、学校はマンモス校でまるで大学のようだったと教えてくれました。ホームルームはなく選択した授業のクラスのところへ行くというシステムだったので、最初は友達作りに苦労していたようです。友達やホストファミリーと一緒にスキー、スケート、映画など様々な場所に行き、買い物などもして、楽しんでいたようです。クリスマスには、アイザックの祖父祖母の家でのパーティーに参加し、楽器を弾き、ダンスをして楽しんだそうです。息子が言うには、カナダは日本よりも自由度が高く人種が混ざっていることで、どこか解放された気分になるそうです。

アイザックは日本に来る目的の一つがゲームセンターでゲームをすること、漫画を読むことで、そのほかの観光やスポーツにはあまり興味を示しませんでした。

しかし、友達や息子とカラオケや食事、お祭りにも行っていました。そして彼はどうしても札幌のアニメショップに行きたいということで最終日に釧路からバスで行き、テレビ塔などを見学して、アニメショップにも行きました。持参したお金はほとんど、アニメやゲーセンに使ったようでお金が不足していたようなので１万円貸してあげました。ゲームセンターに行くときは友達から借りた自転車で一人で行っておりすっかり日本人だなと感じました。

アイザックの持参したカード、携帯は日本では使えないもので少し困りました。

Wi―Fi があったので家族との連絡には問題なかったのでよかったです。行きも帰りも台風の影響でスムーズに物事が進まず、大変な思いをしてないか心配でしたが、本人に確認してみると、むしろ滞在期間が延びて喜んでいるようで安心しました。息子の滞在中に銃撃事件があって心配しましたが、無事に帰ってきて何よりです。違う国民性の人々と交流することには困難がつきものですが、他国文化を知ることは大変有意義なことで、担当の職員の方々や先生には感謝の気持ちでいっぱいです。

3 教員編

（引率・受入担当）

令和元年度　高校生交換留学促進事業の往路引率を終えて

北海道札幌国際情報高等学校　教諭

令和元年 11 月 17 日から 24 日まで、カナダ・アルバータ州への交換留学往路引率をしてきました。自分自身にとってもREXプログラムによる派遣依頼 10 年ぶりのアルバータ州訪問となり、懐かしさと今後へのよい刺激を受けて帰ってくることができました。

【カナダ上陸】

事前研修以来久しぶりに参加者全員が顔を合わせました。生徒たちは SNS 等を通じてお互いに連絡を取り合っていたようで、再開を喜びつつこれから始まる外国生活への期待を膨らませていました。バンクーバー空港の入国審査では、生徒の 1 人が審査に時間がかかっていましたが、無事に手続きを終えていました。このように予期せぬところでハプニングが起こったとき、自分の力でコミュニケーションを取っていけるかが、これからの留学生活でも大事になってくると思いました。

カルガリー空港で 4 名の生徒を現地コーディネーターに無事引き渡すことができ、エドモントン空港に到着しました。

【登校開始】

到着翌日から早速登校が始まります。同時に自分の視察も始まったわけですが、生徒たちは一様に不慣れな校舎や時間割作りなど、これからの学校生活起ち上げにとまどいながらも前向きに頑張っていました。始まったばかりなので、この時点では特に解決しなければならない問題も特になく、ホストファミリーとの意思疎通も上手くいっているようでした。何よりどの生徒もパートナーとの信頼関係がしっかりしていたので余計な不安なく過ごせていたようです。

【英語力と人間力】

往路引率では生徒たちの本格的な留学生活がこれから始まるところだったので、今後この生徒たちがいろいろな場面で自らの選択と判断で行動し、周囲の人たちに助けてもらいながら経験を積んでいくであろうことを想像していました。生徒たちが普段北海道で、主に学校の英語の授業で鍛える英語は、授業が以外の生活で必要とされることはほとんどありません。またその授業でも周りには日本語を話す生徒が当たり前のようにいるので、英語でのコミュニケーションを練習していて行き詰まっても、使用言語が日本語に切り替われば難なくその行き詰まりを打開できます。しかし、いざ留学生活が始まると自分の英語力と勇気や思い切りが何より大切です。トラブルなど起きない方がよいに決まっていますが、どんなことであれ自分が追い込まれたときにその状況を突破できたことは必ず後で自信につながります。そんな経験を留学中にしてもらいたいと願っています。

【終わりに】

今回の引率業務に際し、渡航準備にかかわっていろいろな方々に助けていただきました。無事に業務を終了することができ感謝しています。どうもありがとうございました。

令和元年度北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業報告書

北海道滝川高等学校　教諭

１　はじめに

本年度は１名(男子)の受け入れを行った。

２　受け入れに際して留意したこと

（１）次のような「令和元年度北海道高校生交換留学促進事業留学生受入要領」を事前に全教職員に配布して、校内態勢の確認を行った。（一部抜粋）

Ⅰ．留学概要

留学生　Galas Spencer William (男)

日　程　令和元年８月16日(金) 来道～令和元年10月12日(土) 離道

本校在学期間　令和元年８月19日(月)～令和元年10月11日(金)

Ⅱ．受入の基本的な考え方

①事前連絡はホストの生徒(桑重伶衣さん)が直接メールで行っています。

②基本的に授業は全て受けてもらうが、適宜フリータイムの時間を設ける。

＊次の一週間のスケジュールを全教職員と留学生に提示する。

＊フリータイムの時間は、留学生が一人で自由に過ごせる部屋を用意しておく。

③受け入れクラスには芸術選択がないが、他のクラスに「留学生と交流したい」という生徒がいるので、芸術の授業を受けるときは、その生徒に協力をお願いする。

④可能な限り、部活動に参加して交流の機会を設ける。

⑤異性の組み合わせなので、体育など男女別の授業の際に男子生徒にも協力をお願いする。

（２）受け入れ期間中に見学旅行があるので、参加費用や見学旅行期間等を桑重さんや教育庁住吉主事の協力を得ながらメールで確認して、「参加したい」との回答を得たので、校内態勢を整えた。なお、「見学旅行保護者同意書」署名はホストファミリー保護者の代筆、「健康調査票」は留学生資料の健康状況欄を参考にしてそれに代えた。

（３）本校では夏季休業明けの全校集会がないので、留学生を受け入れる当該学年（第２学年）との交流がスムーズに図れるように、登校１日目の８月19日にウエルカムミーティングを英語授業の一環として、学年集会の形式で行った。

＊　上記（１）～（３）については、後日アルバータ州の担当教員が本校に来校したときに、担当者から説明をして理解を得た。

３　受け入れに際して苦労したこと

見学旅行参加にあたり、異性である故に、宿泊部屋割や自主研修のグループ割に苦労しました。

「交流すればいい」と簡単に割り切れないことがあります。

また、ホストファミリー保護者の桑重さんからの依頼により、見学旅行の旅費を支払ってもらうために、次のような内容を書いた英文を澤田からスペンサーに渡して、お互いに間違いのないようにしました。契約として大切なことをしっかりと伝える必要性を感じました。

通知文の内容

「ご両親に見学旅行代金をあなたの口座に振り込んでもらうように頼んで下さい。次に、そのお金を現金で桑重さんに渡して下さい。そうれば、あなたの代わりに桑重さんが旅行代金を旅行会社の口座に９月19日までに振り込んでくれます。もし振込期限までにお金の準備が間に合わなければ、桑重さんに立て替えてもらうように頼んで下さい。そしてあなたのホームステイ期間内に返すことを約束して下さい。」

４　生徒や家庭にもたらした効果について

桑重さんが報告書のなかで、「“日本で最高の思い出を作ってもらう”これは私がパートナーを受け入れるときに自分自身に定めた目標です。私はたくさんの留学生の受け入れの経験がありますが、男女の異性のペアでの経験はなく、どうなるかわからないまま彼との生活が始まりました。案の定、学校での友達作りの問題や健康面での問題であったり、性格上のすれ違いがおき、とても大変でした。しかしお別れの時、“すごく楽しかった！また日本に来たい！お別れしたくない！”と涙を流してくれ、私は彼が楽しんでくれたこと、自分の目標を達成できたことにとても喜びを感じました。」（一部抜粋）と書いています。生徒にとってはこの感想が全てはないでしょうか。

また、現地での授業、特にＥＳＬ（第一言語が英語でない生徒のための英語の授業）において、英語力が鍛えられたそうです。その意味では、２ヶ月の留学期間はとても有意義なものだったようです。

ホスト生徒以外の生徒に目を向けると、部活動や芸術の授業などで積極的にスペンサーと交流をしてくれた生徒が多く、受け入れて良かったと思われることが多々あったと思います。ただ、英語を話すことに尻込みしてしまう生徒もいたので、そのような生徒には、「逆に日本語を教えてあげるつもりで話しかけてみては？」とアドバイスすることもありました。

日本に来る留学生は日本のことを勉強しに来るのだから、受け入れる側も「英語で話す」ことより「日本語を教える」気持ちがあっても良いのではないでしょうか。

家庭においては、やはり異性を受け入れる気苦労が相当あったと思います。その意味では、異性とのペアリングは問題があるのではないでしょうか。

５　本事業全体に係る感想や課題として感じること

受け入れる側としては、次の点で難しさを感じました。

①定期試験

受け入れ期間中に定期試験があったので、定期試験期間中は登校しないようにしてもらいました。その分、ホストファミリーに負担がかかったと思います。また、生徒も試験勉強が十分に出来なかったようです。カナダ側に合わせるのではなく、日本の学校事情を十分に考慮して受入期間を設定してもらいたいと思います。

②異性の組合せ

異性の組合せは生徒、家庭そして学校にとっても厳しいです。十分に考慮すべき課題だと思います。

結果として、留学生を受け入れたことは本校生徒にとっては有意義なことだった、と言えるかも知れません。交流した生徒達は実に楽しそうに、そして大いに興味を持って交流してくれました。また、教職員の協力体制もとても良かったと感じています。

令和元年度北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業に関わる研修報告書

北海道札幌月寒高等学校　教諭

１．本校における交換留学生の受け入れについて

本校が交換留学生を受け入れるのは、ほぼ１０年振りになる。以前より様々な留学プログラムへ挑戦する生徒は居たが最終結果に結びつかず、生徒と共に学校側も残念な思いをしていた。最近、トビタテ JAPAN を利用してオーストラリアへ行く生徒が出て弾みが付いたのか、この度、喜ばしいことに本事業に参加できる運びとなった。

２．事前準備

前述の通り１０年振りとなる為、以前の担当者もおらず、手探り状態からの開始であった。そのような中、６月に「事前研修会」が開かれ、担当教諭の情報交換ができたところから具体的な準備が始まっていった。

留学生同士・留学生の保護者同士は決定後すぐにメールによるやり取りを始めたので、主に保護者を通じて連絡を取って頂いた。①日本では制服を着たいのか、②日本語の能力はどれくらいか、③本校のどのような活動に興味があるのか、を尋ねた。また、本人へは本校の時程や校内規則についての英訳版を直接メールで知らせた。

校内全体へは、留学生の簡単なプロフィールと留学期間を事前周知し、担当学年の教員へ助力を求めた。また、危機管理上、留学生の自習時間中に監督者が必要となったため、職員全体の了解を得て、自習監督を均等に宛てることになった。

３．受け入れ

受け入れに関し、本校内に困りごとが２点あった。まず、本校には ALT が常駐しておらず、留学生のカウンセリングが native によるものではなかったということ。週１回、カウンセリングの機会を設けたが、恐らく、留学生の微妙なニュアンスをくみ取れてはいなかったと思う。次に、留学生担当部門は教務部国際交流係が担当であったが、該当教諭の担当学年が３年生であった為、交換留学生が在籍する２年生とは接点がなく、実質的には留学生のＨＲ担任（教科：英語）が主に担当することになってしまったということ。留学生や受け入れ家庭には、国際交流係を相談窓口としたが、混乱が生じてしまったように感じた。

留学生 Yuna の留学テーマは「自立」であった。その為か、他人に頼るより何でも自分でしてみることを心がけているように感じた。時にそれが心理的な壁とも感じたが、それも個性と捉えて尊重するようにした。授業については、全ての授業に一通り参加してもらい、それから取捨選択をして、残りの時間を日本語学習に宛てることを勧めた。結局、毎日１時間の自習時間以外は、全て他の生徒と同じく授業を受け、日本語が辛くなったら授業時間に自習するという形式に落ち着いたのだが、ここでも積極的に好みを口にすることはなく、今でも「あれでよかったのだろうか」と考える。週１回のカウンセリング時間に、翌週の時間割を手渡しながら、受け入れ家庭からの疑問点・要望や、Yuna の学校への要望や行動予定などのすりあわせを図った。

４．授業について（HR担任より）

英語の授業は所属するクラスに参加した。ネイティヴの自然なスピードで教科書を音読したり、会話形式の役割を担当したりすることで生徒の学習意欲に良い影響を与えてくれた。単元のテーマに沿った話題として、留学生からカナダと日本の違いを紹介してくれた。文化を比較することで、様々な価値観の存在を認識する良い機会となった。

数学は担当教員が英語のテキストを用意したことで、本校生徒より先に既に習った単元について、クラスメートに説明することもあった。

５．学校生活について（HR担任より）

夏休み明けからスポーツ大会など学校行事に参加してもらった。大規模校からの留学生にとって、スポーツ大会のように全校生徒が一同に介するような行事を経験していないため、クラス単位のチームワークの作り方には興味・関心をもったようだ。玉入れや綱引きなどの団体競技に参加し、クラス対抗リレーでは積極的な応援をした。行事を通してよりクラスに馴染むことができた。さらに、クラスには海外生活を経験している生徒や韓国に興味関心をもつ生徒がいたことで、共通の話題を通して交流を深めることができた。

週末などの休日には、クラスメートと一緒に市街地へ出かけた。ラーメンやお寿司など和食を中心とした食の文化交流や、高校生に流行の製品を求めるなどしてクラスメートとの親交を深めた。

６．課題について（HR担任より）

留学生の気質にもよるが、男子生徒との交流が比較的少なかった。本校生徒も話しかけても伝わらない場合を想定したのか、話しかけるのを遠慮する生徒も少なくなかった。しかし、留学終了後には、もっと伝えられるようになりたいという気持ちは高まったようだ。

７．おわりに

本事業に参加することは、生徒のみならず、学校全体が活性化することとなった。留学生受け入れは、受け入れ体制が整っていない本校にとっては、何から何まで確認、摺り合わせの作業が必要であったが、着実に国際交流へ近づく一歩になった。生徒にとっては勿論良い刺激となったのは言うまでもなく、今後も応募する生徒を募り、またこの事業に参加できる生徒が出ることを祈りたい。

最後に、悪天候により相次ぐ変更に翻弄されながらも無事に事業を終えられた関係各所の方々、受け入れ家庭のご家族の方々、関わられた全ての方々にお礼を申し上げ、報告とさせて頂きます。

令和元年度 北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業報告書

北海道札幌国際情報高等学校　教諭

１　本校の国際交流

本校は国際交流を一つの柱として積極的に推進しており、さまざまなプログラムに関心を持つ生徒が多く、アルバータ州からの本事業による留学生の受入れも継続している。この他にも、米国・中国の姉妹校と友好交流校との交流や、AFS年間留学生の受入れ等も行なっており、ほぼ同時期に２名を受入れることとなった。

事前の準備や調整、オリエンテーション等の実施に関わっては国際交流部担当教員が行ない、日常の学校生活に関わる直接の指導はパートナー生徒の所属するHR担任や各教科の担当者に全面的な協力をいただいた。

２　カリキュラムについて

(1) ホームルーム、時間割等の学習活動について

ＨＲはパートナー生徒の在籍する２学年のクラスに所属し、本校生徒と同様の時間割に基づいて日本の高校生活を体験してもらった。パートナー生徒は国際文化科所属の生徒であるため、必然的に外国語（英語、等）に関するクラスが多かったが、クラスメートと教室内で過ごす時間を最優先とし、英語理解、英語表現、プレゼンテーション等に加え、現代文、数学、等の教科、さらに日本文化に触れる機会を持ってもらう意味で芸術選択科目の「書道」や「美術」にも、参加した。

(2) カウンセリング・日本語学習等の時間について

本校では４学科の授業が展開されている都合で、留学生の受入を意識した授業変更が困難である。また、日本語の授業形式の時間の特設は困難な状況で週に１時間程度と限られた時間ではあったものの、本人が留学前に初級日本語の学習に取り組み、すでに簡単な日本語が出来るようになっていたため、問題なく学校生活と家庭での生活にとけ込むことが出来ていたようだ。

３　学校生活について

健康面においても、不安要素がなく過ごしてもらうことが出来た。通学に関しては小樽市在住のホスト生徒とともに早朝５時には起床し、ＪＲやバスなどの公共交通機関を利用し、かなり早い時間帯に登校するという体力的にも大変な通学を強いられたと思うが、それでも体調を大きく崩すこともなく、常に、また誰に対しても笑顔で接することが出来ていた。家庭と学校の両方での世話係となった本校在籍のパートナー生徒との相性は極めて良好で、互いに仲の良い、本当の姉妹のように信頼と理解を深め合っていた様子だった。学校生活上の学習状況や生活態度等に、最後までトラブルらしいトラブルを起こすことはなかった。折り返しの時期を過ぎ、日本語の上達とともに日本の高校生活と友人関係にもさらに慣れてくれたようで、パートナー生徒が部活動で帰りが遅くなる日にはバス・ＪＲ等を乗り継いで単独で帰宅するようになるなど、１時間を超える遠距離の通学ながらも不安なく励んでいた。

留学生活のスタートが学期途中であったため、短期のプログラムでは特に教科によっては言葉の壁もあり授業参加に困難を伴ったはずだが、通常の授業にも入ってもらったことは良い経験になったようだ。パートナー生徒は勿論のこと、クラスメート達も、慣れない校舎内での教室移動、授業で使用するテキストのお世話など、あらゆる場面で親身に対応し、貢献してくれた。

４　まとめ

今回、本校では姉妹校や他の国際交流に関する業務が同時進行だった時期で、決して手厚いサポートができたとは言いきれないが、明朗闊達、積極的にコミュニケーションがとれるカナダ留学生の行動力に支えられた。また「外国人」や「留学生」という特別な存在として扱うというよりは、「新しい友人」あるいは「姉妹州からの大切な生徒」という姿勢で接してくれたクラスメートや担

任教諭、教科等担当の教職員に感謝したい。さらには「初めてなので物凄く緊張します。でも、留学生というよりも『かわいい娘がひとり増えたつもり』で、自然体でいこうと思います。」と、寛容な姿勢で受け入れをスタートし最後まで思いやりの気持ちを持ち続け、留学生の立場を理解し、お世話してくださったホストファミリーのご対応が、今回の学校における受入れの成功にも繋がる最大の要素だった。

プログラム運営にご尽力いただいた北海道とアルバータ州の双方のご担当のみなさま、関係のみなさまに、あらためて感謝申し上げます。ありがとうございました。

交換留学によせて

北海道苫小牧東高等学校　教諭

去年から引き続き、アルバータからの留学生を受け入れることになりました。毎回思うのですが、来校する留学生も一人一人個性が違うので、まずは会ってからカリキュラムやどんなことを経験させようかと考えます。今回の留学生の Naomi さんは、人前だととても内気で、最初の日はなかなか挨拶もできないほど緊張していました。でも、予想以上に早く学校に慣れ、友人も増えていきました。ただ、自分から積極的に友人を多く作るといった行動はあまり見られなかったので、授業を活用して、できるたけ本校の生徒と多く会話できる機会を設けたり、本人と毎週面談をし、その都度カリキュラム等も変更したりと、できるだけ本人の希望に沿うようにしました。

また、学校では放課後にはダンスを通して、所属クラス以外の友人もでき、特に問題もないと感じていたようです。英語以外の授業にも積極的に参加し、古典の授業では、教科の教員から英語版の源氏物語を借りて読み、感想文を書くなど多くのことに興味をもって参加していました。本人の日本語力はとても高いのですが、話すことにまだ慣れてなかったため、友人との会話を通じて少しずつ話すことにも慣れていきました。留学終了の最後のスピーチでは日本語で挨拶をし、たった３カ月で上達したように思えます。また、家庭での様子も面談で話してくれ、ショッピングが好きな Naomi さんのために週末は外食や買い物に連れていってくれたようです。カナダの家族と離れて寂しいと感じると言っていましたが、日本の留学生活も楽しく過ごしていたようです。

学校生活では、本人からは特に問題となるようなことはなかったと聞いていますし、何か困ったことがあればすぐに伝えてくれたので、早急に対応できました。とても素直な性格で、明るい人柄だったので、学校生活にはすぐに順応できたようです。日本語を指導する際に、教材が不足しており、なんとか担当教員が個人的にもっていたもので対応しました。今後は日本語教材を補助していただけたらもっといろいろ活用できると思います。

留学生受け入れは、生徒にも学校にも多くのメリットがあり、今後もぜひ継続していただきたいと思います。多くの方々にお世話になりました。この場で感謝申し上げます。

令和元年度北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業に係る報告書

北海道登別明日中等教育学校　教諭

１　本校について

道立唯一の中等教育学校である本校は、開校以来１３年間、多くの特徴的な教育活動を行っています。特に国際理解教育については、１回生次から時間割に ALT２名による英会話授業を組み込み、２回生次に管内・管外から多数の ALT と共に１泊２日の「イングリッシュキャンプ」、３回生次には見学旅行を兼ねた福島県のブリティッシュヒルズでの語学研修、４回生次では２日間の予定で近隣の小学校へ生徒全員が英語講師として授業を行う総合学習、５回生ではその集大成としてカナダ・アメリカでの海外見学旅行など、様々な取り組みが行われています。さらには平成２２年にはユネスコ・スクールの指定、平成２６年度には「スーパーグローバルハイスクール」の認定を受け、オーストラリアの高校とのテレビ会議や海外フィールドワーク、各種国際フォーラム等への参加等、生徒が海外に興味関心を持ち、実際に海外に出ようという意欲を高める多くの機会があり、進路先に海外をめざす生徒もおります。本事業については、今年度は４年目にあたり、２名が応募し、昨年度に続き１名の生徒が決定しました。

２　事前準備

本校にある国際理解教育推進委員会の管轄の下に、今年度は４回生（高校１年相当）の英語主担当の教員がメインで、前年度の担当者との情報交換を重ね、所属の学級担任及び学年団との連絡調整を行い、事前の受け入れ体制に動きました。また日本語指導については前年度使用した教材を参考に、指針を確認し、時間割作成、特に面談の時間、及び自習時間を確保するよう留意しました。また留学生とのメールのやりとりや道教委、ホームステイ先との連絡調整にもあたりました。バディとなる生徒についても留学生と来日前の連絡をしっかりと取ることを確認していきました。本校に登校後はできるだけ数多くの生徒、教員と触れあえるようにと、配置学年以外のクラスへの授業参加や英語科教員以外との面談等を意識しました。留学生本人は受け入れ学級の女子生徒達と夏休み中に「ライン」や「インスタグラム」を通じてある程度の交流はありました。

３　留学生の受け入れ

今年度の交換留学生は、日本語を学習している期間も短く、日本語でコミュニケーションを取ろうとはしませんでした。本を読むことが好きで、学校に来ていても英語の本を読み、最初は周りの生徒たちも話しかけづらい状況が続いていました。何かを提案したり、質問しても肯定的な反応を示してくれました。しかし、バディとなる生徒と話をすると、なかなか行動には移すことができないと苦労をしていました。

その後カナダからの担当者の来校や、インドやハワイからの留学生が来ているときには、英語を用いて積極的にコミュニケーションをとっており、本校の生徒たちも、少しずつ話すようになっていきました。本校の生徒たちが、粘り強く英語でコミュニケーションをとり、少しずつ日本語を教

えていました。

日本語学習についても、コミュニケーション重視に変更し、日本語で質問を考えさせ、職員室にて教員と会話する練習を始めました。日本語を話す場面をこちらから作ることで、日本語でコミュニケーションを取ることができました。また、職員と会話することで、学校にいる間に声をかけてもらうことができ、それも彼女にとっては嬉しかったようです。

授業については、毎週担当者が本人の状況から判断して、時間割を再編成して週末に翌週分を渡していました。なるべく多くの先生方と接してもらいたいという考えから、最初の１週間は生徒達と全く同じ時間割でバディの生徒の横で授業を受けてもらいました。２週目以降は本人の意向を確認して、自習時間、面談、日本語学習も取り入れて時間割を作っていきました。英語の授業（コミュニケーション英語Ⅰ・英語表現Ⅰ）、国語総合、芸術（美術）、体育、ロングホームルール、総合学習、学校行事を中心に時間割を組んでいくことと、他学年のクラスでの授業参加及びカナダのプレゼンターションを実施する旨を事前に伝え、少しずつ他の教科にも慣れていったようです。

本校での滞在中、部活動、体育祭、小学校での英語授業の講師、ボランティアのツアーガイド経験など様々な行事に参加し、友人も増え、貴重な２ヶ月となったと思います。

４　本校生徒の渡航

帰国後、１１月から本校生徒が交換留学でカナダに旅立ちました。日本とは全く異なる設置科目、授業スタイルを存分に楽しんでいたようです。保護者や日本のクラスメート達とは「ライン」を通じて情報交換ができていたので、海外での生活の不安はかなり解消されていたようでした。今回の貴重な経験を是非、次の学年に伝えるべく努力するように本人には伝えました。本人は留学を通して、英語の学習に対する意識が、かなり変わったと言っていました。

５　最後に

本事業に参加して４年目となりましたが、本年度も、北海道教育委員会の方々を始め、関係各位の方々のご尽力により、生徒ばかりでなく、我々教員にとっても貴重で有意義な経験を得ることが出来ました。今後も是非積極的にこの機会を活用していきたいと考えております。

実り多い留学プログラム

北海道函館中部高等学校　教諭

始めに２名の留学に関わり企画・運営いただいた関係機関、担当者の住吉さん、カナダ側の高校の先生方、双方のホームステイの御家庭に感謝申し上げます。交換留学を終え、お互いの国の文化や様々な人と関わり視野を広げられたことを実感しているものと思います。留学生が充実した時間を過ごせたのであれば学校側の担当者として嬉しく、私も良い経験をさせていただきました。

ここ数年間連続でのプログラム参加ですが、今回受け入れたカナダ側の留学生は、今までの中でも日本語の授業を粘り強く受け、日本語も大変上達した生徒の１人でした。また、２学年ということもあり修学旅行にも参加し、日本の伝統・文化、歴史や建造物にも触れる機会があったので充実した学校生活だったのではないかと思います。修学旅行中は、体調不良等で病院に行き、病院から函館に帰って来る飛行機への搭乗許可が出ず、ホストファミリーの方に東京まで迎えにきていただき陸路で帰るなどのハプニングもありましたが、本人の旅行記を読むと楽しんでいた様子も伺え、悪い思い出ではなく良い思い出となったようで安心しました。学校の課外活動では、バスケットボール部の活動に参加し、友人も増やしていけたのではないかと思います。

本校の留学生も、１日中英語を話す時間を過ごせたことや、カナダの心地よい文化や習慣にも触れ充実した時間になったようです。留学先のカナダの高校は、一斉授業ではなく自学自習を中心とした自由なカリキュラムで、日本語クラブのお手伝い、フィルムクラブ、ボランティアなど様々な活動に参加したようです。周りの生徒も、日本から来た留学生という認識がなく普通の生徒として接していたようです。また、受け入れていたカナダ側の留学生がいろいろとサポートしてくれたり、日本にいるときよりもたくさん話しができたようでさらに交流ができたようでした。

今回のプログラムでは、本校にとっても初めての男子と女子という留学生のペアーとなりましたが、留学生達がお互いに異文化を理解しながら、サポートしたりする目的も十分に果たせたと考えます。また、留学をする目的を主体的に持っていることが、いかに留学を充実させることが出来るかを決めると改めて感じました。今後、このプログラムを始め留学を考えている高校生の皆さん、頑張って下さい。

１　募集

留学への興味関心が高い生徒も多いため、特別な説明会・ガイダンスは実施せず、教室へのポスター掲示によって周知し、関心のある生徒は担当者を訪ねることになっています。相互に留学生を受け入れるという条件のため、出願者数は多いわけではありません。

２　受入れ準備

本校では、このアルバータ州との交換留学を含め、留学全般については時間割作成から、ＨＲ教室への配置、他教科への留学生の授業参加依頼など全てに渡り、英語科が担当しています。ここ数年続けて受入れさせていただいているので、英語科教員の１人１時間の日本語レッスンなどのサポート体制はもとより、ＨＲ担任や他教科へのカナダ側留学生の授業参加や教科書用意の依頼などの手順も整っておりスムーズに受入準備ができたと思います。特に、担任の先生や他教科の先生方が

快く引き受けてくれたことが、時間割作成の際にも大変大きかったと思います。また、２年生の授業以外にも学年を超えての授業参加もあったため、急に一緒に留学生と勉強し、活動してくれた他学年の生徒達の協力も大変大きかったと思います。

留学生同士はSNSやメールなどを使い、事前に情報交換することが出きていたようで、特に対処しなければいけないことはありませんでしたが、留学生同士が留学に十分準備して臨める結果になったと思います。

３　留学期間中

⑴ガイダンス

担当者が初日の最初の時間に設定し説明を行いました。時間割の希望や部活同への参加希望について聞き、時程、昼食、校則、服装（本校は私服）の説明、校舎案内、常駐ＡＬＴ紹介等実施しました。初日の教職員への挨拶ができ、パートナーから日本語レッスンを受けながら無事こなしてくれました。

⑵教科・科目選択

本校では、最初の週は英語以外の全ての授業に参加してもらい、日本語の理解度や感想をもとに組み立てることにしていましたが、カナダ側の先生との電話の面談で、出来る限り教室にいてクラスメイトを過ごすことが、コミュニケーションの向上にもつながるということになり、基本的に英語を除く全ての授業を受けることでスタートしました。途中でどうしても大変な教科は古典で、調整して自習や日本語レッスンにあてました。LHR・体育は所属ＨＲクラスで、家庭科は３年選択授業へも参加しました。日本語は週４時間。また、毎日１～２時間の自習や空き時間を設定しました。

⑶自習場所

図書室とALT室をいずれも使用可能としました。ALTとも日常的に話すことができ相談や疑問解決に役立ったと思います。

⑷日本語指導

テキストは、漢字の書き方や日本語表現などの日本語学習のテキストが何冊かあり、その中で本人とも相談の上使ってもらうことにしました。しかし、日本語指導の際には、そのテキストのみを扱うのではなく、日常生活で気になった日本語や、話をしていく際に気づいた表現や文法などを取り上げて臨機応変に行いました。友人やホームステイ先の家族との会話でうまく言えなかった表現なども尋ねて実施したことから、文化の違いなども話題になることもありました。

英語科教員の中では、指導した内容や触れた話題などをノートに簡単に記録し引き継いでいくことで、前時での内容確認なども行うことができ、現在の学習内容が全員共通理解できるようにしたことが良かったと思います。

修学旅行の旅行記への原稿を依頼したら、カナダから英語とそして日本語で送ってくれました。日本語が上達した実感でき感心しました。

⑸カウンセリング

週４時間の日本語指導の中で、さまざまな相談にも対応しました。ＡＬＴ（２名常駐、内１名は同じカナダ出身）を紹介し、様々意見交換をしていたようで、本人のリフレッシュにもなっていたようです。

⑹学校生活

- 修学旅行に参加。
- 学年を越えた授業選択も、楽しく参加できたようで特に問題はありませんでした。
- 部活動参加は一つに絞らずに興味のある部活であれば複数の部活動を体験することを勧めました。バスケットボール部を体験しました。
- 学校行事（体育大会）も、生徒の一人として集団に溶け込み、バスケットボールに参加しました。

４　本人と生徒の変化

〈カナダ側留学生について〉静かで穏やかな性格の生徒でしたが、修学旅行自主研修で男子４人のグループで交流が増え、それもきっかけとなり楽しい日々を送ることが出きたと思います。

〈周囲の生徒について〉留学生を迎えるＨＲクラスには、担任の先生からアナウンスしてもらいました。クラスの活動や同じクラブや趣味などで話しかけやすい生徒とそうでない生徒もいたようです。本校生徒は、普段の授業で意識しているコミュニケーションツールとしての英語を試そうと、休み時間に英語で話しかけたりして、英語に触れる機会や時間が増えたことが大きかったと考えます。

５　北海道側留学生の変化

ネイティブとしての英語力も持ち合わせている生徒だったので、英語を使い生活しながら、様々な人と話し交流すること、英語のエッセイ力向上を目指すなどの目標を持ち臨みました。後者の目的は自学自習のスタイルの学校だったので、それほど叶わなかったようですが、前者については親しい友人もでき達成できたようです。今回の留学で、いろいろな刺激を受け海外の大学への進学の可能性も考えたようで進路について考える機会にもなり、これからも一層学習に励んでくれると確信しています。

６　課題

今回は、体調不良等の対応が有りました。問題はなかったのですが、通院前にカナダの保険会社に電話連絡をしたりすることが、日常でも修学旅行中でも起きていたので、ホストファミリーの御家庭には大変お世話になりました。感謝申し上げます。

最後に、今後もこのプログラムが続き、高校生の皆さんが留学という機会を通し成長することが出来れば大変嬉しく思います。お世話になった全ての方々に感謝申しあげ報告とさせていただきます。

令和元年度高校生交換留学促進事業に係る報告書

北海道旭川北高等学校　教諭

はじめに

本校には各学年に、国際交流や海外留学に興味があり、個人的に学外で国際交流イベントに参加するなど積極的に活動している生徒がいる。本事業にも毎年応募する生徒がおり、３年続けて参加させていただいている。また、旭川市が姉妹都市との交換留学事業を行っており、そちらにも毎年生徒が応募している。留学生の受入については、校内委員会等を経ることはないが、過去の資料を参照しながら対応することができる。少数ではあるが、常に留学生が学校にいる状態であるため、留学生が英語以外の授業に参加しやすい環境が比較的整っている。生徒も留学生に興味を持ち、校内スピーチコンテスト等、行事での発表にも真剣に耳を傾ける姿が見られる。

事前準備

留学生とは、本校生徒が早い段階からＳＮＳ等の手段を使って連絡をとっていた。留学生から質問が寄せられ、本校生徒が疑問点を解消してくれていたおかげで、校則や日課表など、登校初日のオリエンテーションでの説明をスムーズに進めることができた。制服は過去の留学生に貸与したものがあり、サイズ変更の必要がなかったため、そのまま使用した。留学生は制服を大変気に入り、購入して本国に持ち帰りたいと話すほどであった。受入期間の終盤に見学旅行が控えていたため、来日前に旅行の目的、日程、費用、おおまかな持ち物についての説明を行い、留学生保護者の承諾も確認した。

留学生の受け入れ

同時期に旭川市の交流事業によるアメリカからの留学生を受け入れ始めたため、はじめは２人とも同じ授業に参加した。２人とも２年次のクラスに在籍し、それぞれのクラスの生徒と同じ授業に参加してもらおうと考えていたが、日本語の理解が難しく、最終的には２年次の英語の授業と体育、１年次芸術の選択授業がメインとなった。選択授業での実習で、実験や調理、植物栽培や収穫などに参加させてもらったこともある。時間が経つにつれ少しずつ自分の希望を話すようになり、内容を変えながら、いろいろな教科の授業に参加できるように配慮した。

部活動については、パートナー生徒が積極的に顧問教諭に相談し、自分が所属する部活動のみならず、文化系の部活動にも数多く体験参加した。部活動を通して、茶道や華道、書道といった日本の文化に触れる機会となり、留学生も楽しい時間を過ごしたようである。

学校行事では、登校開始後すぐに体育大会があり、おそろいのクラスユニフォームを着て競技や応援を楽しんだ。遠足は旭山動物園まで約１２キロをクラスメイトと完歩した。見学旅行では一部留学生のみで行動する場面も設けたが、ほぼ受入クラスの生徒と行動し、自主研修でもパートナーやクラスメイトと行動をともにした。慣れないことの連続に疲れを見せることもあったが、パート

ナーのみならず、周囲の日本人生徒が積極的に声をかけたこともあって、本人にとっても充実した旅行となったようである。

本校生徒の渡航

６月の事前研修での、プログラム過去参加生徒からのアドバイスを参考にして、計画的に準備を進めていた。特に日々の生活については、ＳＮＳ等のツールも使いながら記録を残し、友人ともシェアしていた。カナダの学校での授業については、留学生の帰国前に内容について話し合い、希望をある程度固めることができていた。渡航後は、パートナーの母国での生活ぶり（車で学校に通うなど）を目の当たりにして、新たな一面に驚いたようである。休みの日にはホストファミリーとの旅行を楽しみ、アルバータ州内の観光も満喫した。学校では、日本とは異なる授業に新鮮さを感じながら、積極的に参加した。英語力の不足を感じ、相手に自分の考えを正確に伝えられず苦労したこともあったようだが、持ち前の前向きさでひとつひとつの困難に向き合い、粘り強く克服に努めた。今後の英語学習への動機づけがさらに高まり、帰国後は以前にも増して意欲的に授業に参加している。カナダへの再訪も含めて、今後も海外に目を向け、自らの進路を考えていくつもりである。

最後に

本事業を通して、参加した生徒はもちろん、周囲の生徒にも大きな効果が見られた。パートナー同士がうまくいかないことがあれば、すかさず周囲の友人が留学生に話しかけ、ストレスの軽減に努める様子が見られた。留学生との会話はほとんどが英語だったため、周囲の生徒は英語を話さなければならず、それにより結果的にではあるが英語への興味や関心を深めた生徒もいるようだ。自分とは異なる文化背景を持つ同世代の生徒と関わることは、大変意義のあることだと感じる。今後も本校生徒から本事業に参加する生徒が現れ、成果を共有できる機会が継続されることを期待している。

最後に、本年度も交換留学促進事業の運営にあたり、ご尽力いただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

令和元年度高校生交換留学促進事業報告書

北海道帯広柏葉高等学校　教諭

１　受け入れまで

私が赴任してからアルバータ州からの留学生を受け入れたのは３回目で、本校ではほぼ１年おきにこの事業で留学生を受け入れている。また、過去当該学年に私自身がすべてかかわっていたこともあり、今回受け入れについては特に問題点はなかった。本校ではすでに英語でのスクールルールや、学校案内図が用意されており、留学生がくる前にメールで送付することができた。登校初日は簡単なガイダンスとＡＬＴによる面談を行った。大人しく真面目な生徒だったので、ほとんどのことはスムーズに進んだ。

２　カリキュラムについて

私が担当教諭・英語科・ＨＲ担任の全てを兼ねていたため、カリキュラムは私一人で組んだ。２年生での受け入れではあったが、１年生の芸術科目（書道・美術・音楽）に毎日入れてもらうようにした。書道は週に２回取り組んでいたので、帰るころにはかなりの腕になっていた。あとは数学、英語、体育、情報の時間はＨＲに入り、空いた時間は図書館での自習とした。日本語についてはもともとある程度理解できていたので、特に教えたりしていないが、ひらがなや漢字のドリルを渡したので、自習時間に取り組んでいた。また、本人は理系であるのに、文系クラスに入ったので、理系の化学の実験に参加させてもらったりもした。

英語の授業では生徒によるプレゼンテーションの課題がちょうどあったので、それを見てもらい感想を述べてもらったり、留学生にもカナダの学校を紹介するプレゼンを行ってもらった。最初の体育の授業で突き指をしていきなり病院にいくアクシデントもあったが、クラスの生徒とはどんどん距離を縮めることができた。受け入れ期間内に定期考査があったが、留学生は音楽室で日本の映画を英語字幕で鑑賞した。非常に喜んでいた。最終日には学年集会で、英語と日本語で挨拶してもらい、滞在中の思い出をプレゼンしてもらった。生徒にも大変好評であった。

３　留意したこと、苦労したこと

過去の留学生が非常に個性的であったため、心配していたが、今回の留学生はシャイだけれども、きちんと挨拶や応答のできる、ある意味日本人的な礼儀正しさのある生徒で、受け入れに困ることはほとんどなかった。ただ、こちらの生徒は女子で、留学生は男子だったのでなるべく男子の友人を作れるように配慮した。積極的に関わろうとしてくれる男子生徒が複数おり、その生徒の家に遊びに行ったり、一緒に映画やカラオケに行ったりと交流できたようである。クラスの生徒にとっても、留学生と友人になるという貴重な経験をすることができ、教育的効果が高かったと思う。

４　北海道留学生について

カナダの留学生を受け入れるにあたって、本校の留学生の保護者（母）が英語を理解出来る方

で非常に助かった。来道前に、保護者同士のメールのやりとりや留学生同士のＳＮＳでのやりとりがあり、スムーズな受け入れにつながったように思う。

本校の留学生はもともと積極的で英語が得意な生徒であったが、異文化の異性との暮らしはかなり大変だったと推察する。カナダでの生活もよいことばかりではなかったようだが（ホストマザーとうまくいかなかった面があったようだ）、どんなことも前向きにとらえて楽しむことができるようになって帰ってきたように思う。

５　本事業について

事前の説明会は保護者・生徒にとってとても有益なものだったと思う。教員同士の話し合いの中で感じたのは「日本語を教える」ということが受け入れのハードルになっていることだ。正直たったの２か月の滞在中に、日本語を教えるプロでもない我々が、忙しい合間をぬって留学生に日本語を教える時間はなかなか取れないのが実情だ。そこは生徒同士の交流に任せようと割り切った方が、英語科以外の先生方にも、気持ち良く受け入れに協力してもらえるのではないかと感じた。

令和元年度（２０１９年度）高校生交換留学促進事業報告書

北海道鹿追高等学校　教諭

１　はじめに

本校では毎年鹿追町から多大なる支援を受け、１学年の学校行事として、１０月に「カナダ短期留学」として２週間カナダを訪れています。現地では、ホームステイや姉妹町の高校などで日本文化紹介として様々な活動を披露したり、現地の方と交流を深めたりする機会があります。また、毎年７月には、姉妹町から訪問団が来町し、ホームステイの受け入れを多くの家庭に協力いただいています。訪問団が来校した際には、授業や学校祭に参加するなど本校の生徒たちは異文化に触れる機会が多くあります。また、道内で行われるJICAのプログラムやイングリッシュ・キャンプなどの短期の国際交流プログラムにも毎年のように生徒が参加しており、国際交流に高い関心を持っている生徒が多くいる印象があります。

２　受入準備

本校ではここ数年にわたり本事業に携わる機会をいただいているため、前任の担当教諭が作成した英語版の学校ガイダンス・ハンドブックが既に完成されています。今年も事前にカナダ生徒と保護者へＥメールで、地域の特徴や、本校の規則、特に制服（正装）、略装（白色ポロシャツ）、運動靴、上履きなどについてやりとりをしました。制服は本人のサイズに合うものを事前に準備しておき、登校日前に本人に渡すことができました。前任者から、カナダでは白いポロシャツは手に入りにくいこと、上履きという概念を理解しづらいことを聞いていましたが、ポロシャツはさっそくネットで購入してくれ、上履きについても特に問題なくスムーズに登校を始めることができました。夏休み明けの日が初登校日だったため、全校集会で英語・日本語であいさつできるようパートナー生徒やホストファミリーに日本語指導してもらうなど、様々な場面で協力していただき無事留学生の登校が始まりました。

３　授業について

本校は各学年２間口の規模の学校ですが、授業はコース制を導入しており、特別進学コース・国際教養コース・情報ビジネスコースという３つのコースに分かれて授業を展開しています。到着後の１週目は基本的にパートナー生徒と同じ２学年の国際教養コースの授業を受け、その後、本人の希望で自分の興味・関心に合う授業に行くようにしました。

担当教員の英語の授業では、カナダのことを教えてくれたり、一緒にペアワークをしたり、生徒たちが英語を練習している間日本語の訳を書いて理解したりするなど、積極的に関わりました。

１年生に対しては、日本語を交えて自国の文化や学校を紹介するプレゼンテーションを行いました。考査期間中留学生が自らスライドを作り、考査明けに発表しました。「カナダ短期留学」準備の授業の中で、慣れない日本語を使って一生懸命発表する姿に、「自分たちもカナダに行ったらがんばって英語を話そう」という気持ちにさせてくれる素晴らしいプレゼンテーションでした。

後半は、本人の希望で、数学や物理、化学、体育など学年を越え授業に参加していき、自ら交流

も広げていきました。日本語のレベルは、基本的な日常会話とひらがな・カタカナの読み書きができ、小学生低学年レベルの漢字も少しわかるレベルでした。日本語は、日本語学習用のテキストを本人に渡したところ、自分で学習を進めていました。学校では、担当教員や空き時間のある教員が日本語指導を行い、日々のクラスメイトとの交流の中で理解力を深めていきました。

４　その他の学校や家庭での活動について

日本のホストファミリーには細部にわたり細やかな気遣いをしていただきました。週末一緒に部活動の大会に行ったり、忙しい時間をぬって買い物や観光に連れて行ったり、毎日、本人の嗜好に合わせた食事を準備するなど留学生を家族の一員として受け入れてくれました。留学生が体調を崩して高熱を出した時も、文化の違いから病院や薬を拒否する留学生を、「自分の子どもだったら」と親身になって教員とともに本人を説得してくれました。カナダ留学生はどちらかというと内省的な生徒だったため、周囲が本人の意思を確認する必要がありました。ホストファミリーが試行錯誤しながら本人の意向を理解し、温かく接してくれたため、安心して留学期間をお任せできたことを大変感謝しております。

部活動はパートナー生徒が野球部に所属しており、危険なスポーツのため練習には参加できませんでしたが、見学したり週末ホストファミリーと一緒に試合を観戦したりしました。日本での生活が慣れてくると、バドミントン部や書道部の練習に参加するなどパートナー生徒とは別の活動をして、自ら校内での交流を広げていきました。

最終日には、所属する２学年生徒によるサプライズ企画がありました。「ハンカチ落とし」や「だるまさんがころんだ」「手つなぎ鬼」など日本の伝統的な子どもの遊びをして楽しみ、本人の活動をまとめたＤＶＤを見てケーキを食べました。留学生は感情をあまり外に出さないタイプでしたが、「帰りたくない」と涙を見せ、本人にとっても本校生にとっても心に刻まれるよい思い出となりました。

５　終わりに

本事業は、カナダへ留学した本校生徒のみならず学校全体に素晴らしい影響を与えます。国際社会を生きていく生徒たちにとって、自分とは異なる文化を持った同世代の生徒と深く関われることは大変意義のあることだと感じます。本校の生徒たちは、カナダ留学生から大きな刺激を受け、同じ人間として自然に接することを学びました。また、本校からカナダへ留学した生徒が自信に満ちた表情で帰国し、授業で積極的に発言することも多くなり、さらに海外を視野に入れた進路を考えるようになるなど、この交換留学プログラムを通じて得た経験が本人の大きな変化につながっていると感じております。

本事業を支えてくださった多くの方々に感謝申しあげます。

令和元年度（2019 年度）高校生交換留学促進事業に係る研修報告書

北海道釧路湖陵高等学校　教諭

１．はじめに

本校が今事業に参加したのは初めてである。留学に興味のある生徒は多いが、学校が留学生を長期受け入れた経験はなく、これまで南カリフォルニア短期留学とトビタテ！留学 JAPAN に数年に１人参加するか、自費で短期または長期留学をする生徒が年に数人いる程度である。

本校は、理数科と普通科があり、これまで医進類型指定校、スーパーサイエンスハイスクール（２期目）、アクティブ・ラーニング実践研究道東地区研究拠点校・サポート校に指定されてきた。SSH 事業の一環として、１期に１学年理数科のカナダ研修を実施し、毎年 JICA と連携で様々な国の留学生との交流授業を行い、さらに英語発表会のため大学の留学生や管内の ALT との交流がある。また、平成 29 年度より ALT が常駐し、外国語部が平成 30 年度に JENESYS2018 に初めて参加した。

２．事前準備

留学希望者は１年生のみを対象とし、担当教諭が主に授業で募集したり個別に声掛けをしたりした。１学年のうちに三者面談を実施し最終的に希望者１名を選考した。本校には国際交流部のような分掌がなく、本校生徒の担任兼英語科教諭が実務的な準備をほぼ全て行った。事前研修後、職員全体に協力をお願いし留学生の簡単な紹介を載せた文書を配布した。パートナーのアイザックとは、本人、彼の保護者またはパートナーの本校生徒を通してメールで何度かやり取りを行い、事前研修でいただいた資料をもとに本校の規則やスケジュールなどについての資料を作成し添付した。アイザックとは主に日本語の教材と制服について確認し、それ以外のことは本校生徒を通して連絡した。制服については、アイザックの身長が高く登校初日までに日本でズボンを購入することが難しかったため、カナダで調達してもらった。

３．留学生の受け入れ

（１）　校内生活やホームステイ先について

台風の影響で釧路到着が遅れたため、事前登校はせず、登校初日に全校集会で留学生に日本語で挨拶をしてもらい、その後事前にメールで送っていた資料を使用しオリエンテーションを行った。普通科文型クラスであるパートナーの本校生徒と同じクラスに在籍した。アイザックは多少内向的な傾向はあるが、日本語能力が高く、前向きで何でもよく話す男の子だったため、周囲の生徒とすぐに打ちとけることができた。男子が比較的少ないが仲が良いクラスでもあり、パートナー生徒を含め皆で一緒に昼食を食べたり、移動教室など校内でもよく一緒に行動したりしていた。教室やトイレ掃除は経験がなく最初は戸惑っていたが、クラスメートの親切な指導のおかげで、最後にはうまくできるようになった。登下校は、当初パートナーの保護者が送り迎えをしたりバスを利用したりしていたが、アイザック本人の希望で徒歩や自転車通学にした。パートナーは弓道部に所属していたため、一度弓道部に見学に行ったがその後は

どの部活動にも参加しなかった。また、パートナーが部活動で放課後や休日も忙しかったため、アイザックは１人で帰ることが多かったが、クラスメートや他クラス、他学年の生徒と放課後や休日にゲームセンターやカラオケなどに行ったりしていたようだった。パートナー自身も、アイザックと帰宅後に話したり、花火大会など釧路市のイベントにクラスメートたちと一緒に出掛けたりしていた。さらに、パートナーの保護者はアイザックを誘っても本人があまり外出したがらないのを気にしていたが、休日にはできるだけ色々な場所に連れて行っていたそうである。アイザックはゲームが大好きで、カナダでは絶対に出会えない日本人のゲームの達人と釧路で会えたことが、人生最大の貴重な経験になったそうである。最終日はパートナーが部活動の大会参加のため不在だったが、台風の影響で滞在期間が延びたため、たまたま修学旅行に出発するパートナーやクラスメートたちと千歳空港で会うことができ最後のお別れができた。

（２） 時間割

本人の希望で最初は受け入れクラスでパートナーの２学年普通科文系の時間割通りの科目を全て受けてもらい、週ごとにアイザックの希望に沿う時間割を作り上げた。パートナーの時間割をベースに、古典と日本史、世界史、政治経済を、２学年理数科数学と理数科物理、理数科化学や、１学年芸術科目の書道と音楽、マンツーマンの日本語指導時間に振り替えて毎週作成した。日本語指導時間と自習はできるだけ毎日１時間ずつ入れた。日本語指導時間を利用して毎週金曜までに留学生の希望を確認し、次週の月曜日にその週の時間割を渡した。各科目担当教諭には直接協力をお願いした。最終的には、現代文Ｂ、コミュニケーション英語Ⅱ、英語表現Ⅱ、理数科数学ⅡＢ、普通科数学ⅡＢ、理数科物理、理数科化学、普通科化学、普通科生物、普通科地学、情報、体育、保健、音楽、書道で時間割を作成した。当初は、日本語指導時間や自習が多くなると思っていたが、アイザックの日本語能力が高かったことや理数科科目が得意であったため、２学年文型理科や数学以外に、２学年理数科理科や数学も受けた結果、日本語指導時間や自習の時間が取れない日もあった。アイザックは数学や化学がすでに高校終了レベルまで終わっており、物理においても本校の授業の内容は全て習っていたため、知識がある段階で授業を受けられたことが日本語能力向上に大変役立ったそうである。そのため、あえて理数科のクラスや選択授業など、学年やクラスをまたがった時間割編成としたが、アイザックの人柄もあり周囲に溶け込んで熱心に受けていた。アイザックは当初、運動能力について自信を持っておらず体育大会への参加も拒んだが、幼いころに柔道教室に通っていた経験もあるなど実際には高い運動能力があり、体育のサッカーや柔道を楽しんでいた。また、コミュニケーション英語や英語表現の授業は、日本語を勉強しに来ている本人のためにあえて入れていなかったが、本人が受けたがったため時間割に組み込んだ。

日本語指導と自習時間は図書室で行い、本人が必要であればパソコン室にある学校のパソコンか自分のタブレットを使用してもらった。アイザックは本校での生活やホームステイ先でもうまく順応しており特にストレスを発散する機会を必要としなかったため、常駐ＡＬＴとの面談も１度のみ実施した。

（3） 日本語の指導

担当教諭が全て担当した。事前にメールで確認していた教材を持参する予定だったが、既に来日前に全て終えており、日本語文法やひらがな、カタカタ、簡単な漢字は理解していて問題なく日常会話ができるレベルだった。そこで本人の希望もあり、毎週パートナーの使用している英語参考書の例文の日本語暗記テストをすることと、毎日日記をつけることを課題とし、日本語指導の時間にそのテストと日記の確認やその内容についての会話、学校の授業で分からなかった表現などの確認などをすることにした。パートナーの考査期間はアイザックにも通常のテストに加えて文法テストを実施した。また、帰国前に日本語と英語でカナダの学校や生活についてのプレゼンテーションをしてもらった。アイザックは日本語能力の向上という留学の目的をしっかりと意識して生活し、休みの日も必要以上の外出を控えてできるだけ勉強時間に費やしたいと言うほどの勤勉な生徒であったため、担当教諭としても大変指導しやすい生徒であった。

4．本校生徒の渡航

本校生徒のアイザックと日本で築いた良い関係がカナダでも続いていたことが、渡航後のラインなどでのクラスメートへの近況報告からもうかがえた。社交的な性格なため、一緒にホームステイ先に滞在していたスペインからの留学生とも仲良くなり、ホストマザーの知り合いともよく出掛けたりしていたようである。また、大きな学校であるため様々な国から留学生を受け入れており、その生徒や現地の生徒とも友達になり、慣れない生活や授業にも違いを受け入れながら充実した生活を送っていたようである。実際に留学してみると、自信があった自分の英語力が他の国からの留学生と比べてずっと低いことや、英語だけではなく2、3か国語を普通に話す生徒を何人も目の当たりにしてショックを受けたそうである。また、世界中の生徒と接するうちに、日本人として日本や世界の歴史について知識不足であることを痛感したそうである。さらに、自分のことは自分でする経験をし、家事などをこれまで親に頼っていたことを反省したようである。この留学は、本人にとって謙虚に自分を見つめ課題を見つけることができたとともに、今後の進路実現に向けて貴重な経験になった。

5．成果と課題

本校の生徒は常駐 ALT の授業を受けており、理数科の生徒は年上の外国人留学生と接する機会もあるため、アイザックに対しても臆することなく自然に対応していたが、同年代の外国人と接する機会はほぼないため、生徒にとって異文化圏の高校生と友達関係を築く良い機会となった。また、アイザックとの交流で異文化理解が深まったり、日本語で対話をしながらも必要な説明には英語を使用する場面もあり、生徒の英語力向上への意識が高まったりした。また、異文化への関心が以前よりも強くなり、別の交換留学事業へ申し込んだり、自費での短期留学をしたり、海外への大学進学を決めた生徒も出てきた。

パートナーの本校生徒が留学後の報告発表会で堂々と英語で発表をし、英語力向上と生徒の成長した姿をじかに見ることができ、本事業へ参加できたことに大変感謝している。本校からこのような生徒を今後も増やしていくために、この経験を発表する別の機会を設けたりして今事業の周知を

徹底する必要がある。

またアイザックは、日本での生活で自己肯定感や自己有用感を得ることができたと、今事業の参加に大変感謝していた。また、日本人の生徒が学校の規律を守り、きちんと掃除をし、相手に対して親切に対応することにも感銘を受けたそうである。自分も積極的に人を助けられるようになりたいと言っており、日本語力向上だけではなく、本人の自信や成長の一助となったことは本当に嬉しいことである。

本校は留学生受け入れの経験がなく受け入れ自体になじみのなかった教職員もいたが、積極的に本事業に関わってくれたため、学校全体で異文化交流への意識が高まり、受け入れに対する理解が深まった。留学生が参加したおかげで、生徒はもちろん教員である自分の知識が深まったという感想もいただいた。しかし、受け入れに対して十分な体制が整っておらず、最後まで手さぐりの状態であった。今後は改善していきたい。

今事業での留学生の受け入れに対し、ホームステイ先になってくださった本校生徒の保護者の方には留学生の滞在はもちろん、台風の影響もあり空港までの送迎など大変なご配慮とご苦労をいただいたが、深いご理解とご協力のおかげでアイザックは充実した留学生活を送ることができた。しかし、地理的に不利な面もあり、家庭への受け入れの負担を考えると保護者は消極的になる傾向がある。学校側からのサポートをしっかりと伝えて本事業への理解をしていただく努力が必要である。

６．終わりに

今事業の運営を担当されている吉住主事をはじめお世話になった教育局の方々、両国の留学生を全面的にサポートしてくださったホストファミリーの皆様、快く温かいアドバイスをくださった他校の担当教諭や引率教諭の先生方、今事業への参加の機会を与えてくださった校長先生や副校長先生、教頭先生、教職員や事務職員の方々、その他今事業に関わってくださった全ての方々に深く感謝申し上げます。